

CentreCOM® **8124**

ユーザーマニュアル



ご注意

本書の中に含まれる情報は、当社（アライドテレシス（株））の所有するものであり、当社の同意なしに、全体または一部をコピーまたは転載しないでください。当社は、予告無く本書の全体または一部を修正・改訂することがあります。また、改良のため製品の仕様を予告無く変更することがあります。

Copyright 1998 アライドテレシス株式会社

商標について

CentreCOM は、アライドテレシス株式会社の登録商標です。
本マニュアルの中に掲載されているソフトウェアまたは周辺機器の名称は、各メーカーの商標または登録商標です。

電波障害自主規制について

この装置は、情報処理装置等電波障害自主規制協議会（VCCI）の基準に基づくクラスA情報技術装置です。この装置を家庭環境で使用すると電波妨害を引き起こすことがあります。この場合には使用者が適切な対策を講ずるよう要求されることがあります。

使用上のご注意

本製品を安全にご使用いただくために、以下の事項を必ず守ってください。
これらの事項が守られていない場合、感電、けが、火災、故障などの原因となる恐れがあります。



分解禁止

分解や改造をしない

拡張モジュール用スロット以外のネジで固定されているパネルやカバーを開けたり、部品を変更して使用したりしないでください。内部には電圧の高い部分があり、感電や発火のおそれがあります。



感電注意

雷発生時には装置にさわらない

雷発生時には、本体、および電源ケーブル、接続ケーブルなどにさわらないでください。雷発生時に本体、ケーブル類にふれると感電のおそれがあります。



禁止

正しい電源に接続する

本製品同梱の電源ケーブルの電源プラグは、AC100V、50 / 60Hzのコンセント以外には差し込まないでください。また、タコ足配線をしないでください。他の機器と併用すると、分岐コンセント部の発熱による発火や感電のおそれがあります。なお、本製品の定格電源はAC100-120V / AC200-240V、50/60Hzとなっています。



禁止

正しい電源ケーブルを使用する

日本国内など AC100V、50/60Hz の電源電圧で使用する場合は、本製品同梱の電源ケーブル以外のものを使用しないでください。異常な発熱や発煙および本体故障の原因となるおそれがあります。



指示

通気口をふさがない

本製品の通気口をふさがないように設置してください。通気口をふさぐと内部に熱がこもり、火災の原因となります。



禁止

電源ケーブルを傷つけない

電源ケーブルを傷つけたり、破損させたり、加工したりしないでください。また重い物を載せたり、引っ張ったり、無理に曲げたりすると電源ケーブルを傷め、火災や感電のおそれがあります。



プラグを
抜け

異物が入ったら電源プラグを抜く

万一、異物(金属片、水、液体)が内部に入った場合は、電源プラグをコンセントから抜いてください。



禁止

適切な場所に設置や保管をする

次のような場所に設置や保管をしないでください。火災や感電の原因となることがあります。

- ・高温、多湿の場所
- ・火気のある場所
- ・直射日光があたる場所
- ・ホコリが多い場所
- ・振動が激しい場所
- ・腐食性ガスの発生する場所

ご使用いただける環境の範囲は次の通りです。
温度 0 ~ 40 湿度 80%以下(結露なきこと)



プラグを
抜け

設置や移動のときは電源プラグを抜く

本製品を設置、および移動する場合は、接続されている装置の電源スイッチを切り、本製品の電源プラグをコンセントから抜いて行ってください。電源ケーブルが傷つき、火災や、感電の原因となったり、装置の落下などによりケガの原因となることがあります。



光源注意

光源をのぞきこまない

光ファイバケーブルの端面やモジュールのLEDアタッチメントなどを直視しないでください。これらは強力な光源を使用していますので、目を痛めるおそれがあります。



禁止

本体の上にものを置かない

本体の上に金属類を置かないでください。開口部(通気口など)から内部にクリップやホチキスの針のような金属類が入り込むと、本体内部がショートし、火災や感電の恐れがあります。また、本体の上に花瓶、コップなど水の入った容器を置かないでください。水がこぼれた場合、火災や感電のおそれがあります。



指示

本体ボディのお手入れ

本体ボディのお手入れは、柔らかい乾いた布でふいてください。汚れがひどい場合は、水でうすめた中性洗剤をふくんだ布でふいた後、からぶきしてください。シンナー、ベンジン、アルコールなどは使用しないでください。

このマニュアルについて

このたびは、CentreCOM 8124 をお買いあげいただき、誠にありがとうございます。

本製品は、10Mbps と 100Mbps を自動認識するポートを 24 ポート装備したファーストイーサネット・インテリジェント・スイッチです。

既存のイーサネットLANシステムにおけるアプリケーションやネットワークソフトウェアの変更を必要とせずに、最大伝送速度を10Mbpsから100Mbpsに移行させることができます。

また、ASICによるスイッチ処理と内部高速バスによって、ネットワークのパフォーマンスがさらに向上します。

SNMP(簡易ネットワーク管理プロトコル)による管理が可能なSNMPエージェントにより、SNMP マネージャから各種情報を監視・設定することができます。

また、内蔵されたソフトウェアによって、Telnetやコンソールポートから簡単な設定や診断も可能です。

このマニュアルをよくお読みのうえ、正しくご使用ください。また、お読みになった後は、保証書とともに大切に保管してください。

マニュアルバージョン

1998年 8月 Ver 1.0 pl 0 初版

マニュアルの構成

1 はじめに

本製品をご使用いただく前にご理解いただきたい注意点、各部の名称と働き、設置および接続方法などについて説明しています。

2 CLI の操作

CLI(コマンドラインインターフェイス)をご使用いただく前に必要なターミナルソフトの設定、Telnet からのログイン方法、CLIの基本的な操作方法などについて説明しています。

3 コマンドリファレンス

CLIでご使用いただけるすべてのコマンドの機能と、その使用方法およびパラメータ設定方法について説明しています。

4 付録

トラブルシューティング、ソフトウェアのダウンロード方法、スイッチの基本的な概念、仕様について説明しています。

5 保証とユーザサポート

本製品の保証と、障害の際のユーザサポート、調査依頼書のご記入方法について説明しています。

目次

ご注意	ii
商標について	ii
電波障害自主規制について	ii
使用上のご注意	iii
このマニュアルについて	iv
マニュアルの構成	v
1 はじめに	1-1
1 特長	1-2
2 梱包内容	1-3
再梱包のためのご注意	1-3
4 各部の名称と働き	1-4
前面	1-4
背面	1-6
側面	1-7
5 設置	1-8
デスクの上などに設置する場合	1-8
19 インチラックへ取り付ける場合	1-9
6 拡張モジュールの装着手順	1-10
7 接続	1-12
電源ケーブルを接続する	1-12
電源を入れる / 切る	1-12
ネットワーク機器を接続する	1-13
コンソールを接続する	1-15
2 CLI の操作	2-1
1 操作の流れ	2-2
2 ターミナルソフトの設定	2-3
Windows 3.1 の「ターミナル」の設定手順	2-3
Windows 95/NT の「ハイパーターミナル」の設定手順	2-4
VTTERM の設定手順	2-5
3 Telnet でログインする	2-6
Windows 95/NT の「TELNET」の設定手順	2-6
CentreNET PC/TCP の設定手順	2-8
4 コマンドの操作方法	2-9
コンソールでの入力操作	2-9
表示データが複数ページにわたる場合	2-12
エラーメッセージについて	2-13
5 コマンドの表記について	2-14
コマンドライン構文と表記の意味	2-14

3	コマンドリファレンス	3-1
1	コマンドについて	3-2
	コマンド構成	3-2
	コマンドライン一覧	3-3
2	コンソールコマンド	3-7
3	システムコマンド	3-12
4	IP コマンド	3-19
	IP コンフィグレーション	3-19
	ARP(Address Resolution Protocol)コマンド	3-23
	Ping コマンド	3-24
5	SNMP コマンド	3-27
	SNMP コミュニティストリングコマンド	3-27
	SNMP Trap コマンド	3-28
6	データベースコマンド	3-31
	学習テーブル	3-32
7	バーチャル LAN コマンド	3-36
	バーチャル・ブロードキャストドメイン	3-38
	バーチャル・ブロードキャストドメイン設定例	3-41
	セキュリティ VLAN	3-43
	セキュリティ VLAN 設定例	3-46
	ポートモニタ	3-48
8	ポート設定コマンド	3-51
9	統計情報コマンド	3-56
10	スパニングツリーコマンド	3-60
	スパニングツリー設定例	3-68
11	パラメータデフォルト値	3-71
4	付録	4-1
1	トラブルシューティング	4-2
	セルフテストについて	4-2
	トラブルと思ったら	4-2
2	ソフトウェアのダウンロード	4-4
3	スイッチの基本的な概念	4-9
	MAC アドレス	4-9
	ブリッジについて	4-9
	スイッチとは	4-11
4	仕様	4-13
	コネクタの仕様	4-13
	ケーブル仕様	4-14
	拡張モジュール仕様	4-16
	本製品の仕様	4-18

目次

5	保証とユーザサポート	5-1
1	保証とユーザサポート	5-2
2	調査依頼書のご記入にあたって	5-3
	調査依頼書 (CentreCOM8124).....	5-5

1

はじめに

この章では、本製品をご使用いただく前にご理解いただきたい注意点、各部の名称と働き、設置や接続方法について説明します。

1 特長

CentreCOM 8124 には、次のような特長があります。

24 ポートの 10/100Mbps 自動認識ポート

ポートごとに Full/Half Duplex の通信モードが設定可能

コンソール操作で簡単に各種設定が可能

ポートミラーリング機能によるポートのモニタが可能

8192 件の MAC アドレスを登録可能

スパニングツリー機能搭載

2 種類の設定方法が可能な VLAN 機能搭載

SNMP エージェント機能による監視が可能

RMON MIB(グループ 1、2、3、9)をサポート

2 梱包内容

最初に梱包箱の中身を確認して、以下のものが入っているかを確認してください。

CentreCOM 8124 本体(1 台)

電源ケーブル(1 本)

RS-232 クロスケーブル(1 本)

ラック取り付け金具(2 個)

ラック取り付け金具用ネジ(6 個)

保証書

お客さまインフォメーション登録カード

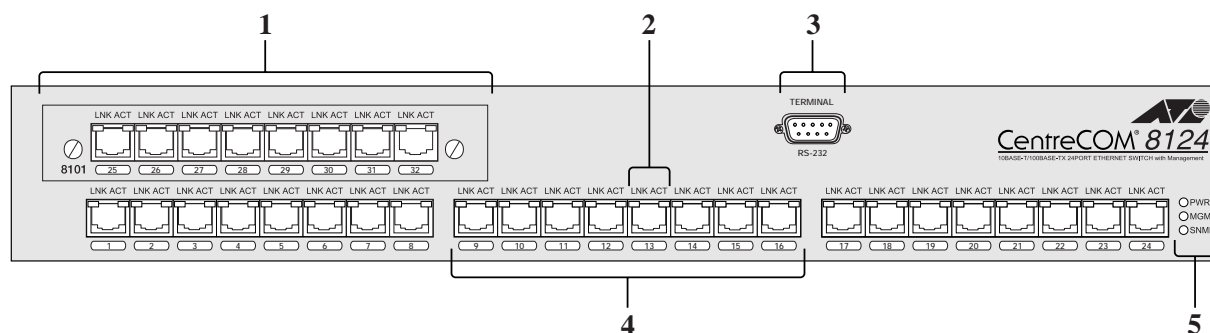
ユーザーマニュアル(本書)

再梱包のためのご注意

本製品を移送する場合は、工場出荷時と同じ梱包箱で再梱包されることが望めます。再梱包のために、本製品が納められていた梱包箱、緩衝材などは捨てずに保管してください。

4 各部の名称と働き

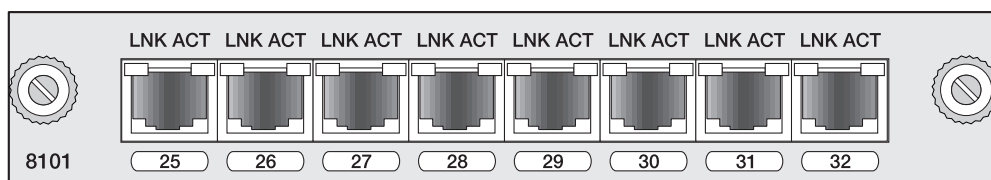
前面



1. 拡張モジュール

以下の2種類の拡張モジュールを装着するためのスロットです。

CentreCOM 8101

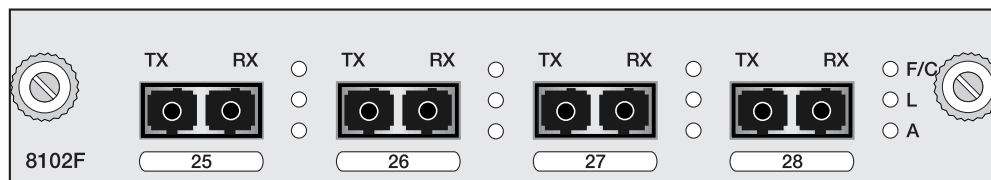


100BASE-TX/10BASE-T 自動認識インターフェイスを8ポート装備した拡張モジュールです。

LNK(緑) ポートと接続機器とのリンクが確立し、相互に通信が可能な状態になったときに点灯します。

ACT(緑) パケットの受信が正常に行われているときに点灯します。

CentreCOM 8102F



100Mbpsのファイバーケーブル対応の高速ポートを4ポート装備した拡張モジュールです。

F/Q(緑/黄) ポートの通信モードがFull Duplexに設定されているときに緑色に点灯します。

セグメント上でコリジョンが発生した場合に黄色に点灯します。

L(緑) ポートと接続機器とのリンクが確立し、相互に通信が可能な状態になったときに点灯します。

A(緑) パケットの受信が正常に行われているときに点灯します。

2. 10/100M ポート LED

10/100M ポートの状態をモニタするための LED インジケータです。

LNK(緑) ポートと接続機器とのリンクが確立し、相互に通信が可能な状態になったときに点灯します。

ACT(緑) パケットの受信が正常に行われているときに点灯します。

3. ターミナル(RS-232)ポート

本体とコンソールとを接続して、CL(コマンドラインインターフェイス)を使用するためのコネクタです。

4. 10/100M ポート

100BASE-TX/10BASE-TのUTPケーブルを接続するためのコネクタです。CL(コマンドラインインターフェイス)でポートを100Mbps固定、10Mbps固定、Auto-senseのいずれかに設定します。デフォルトはAuto-senseです。

5. グローバル LED

システムの状態をモニタするための LED インジケータです。

PWR(緑) 正しく電源が入っているときに点灯します。

MGMT(緑) 自己診断が正常に終了すると点灯します。

SNMP(緑) SNMP エージェント機能が動作しているとき点灯します。

4 各部の名称と働き

背面

1



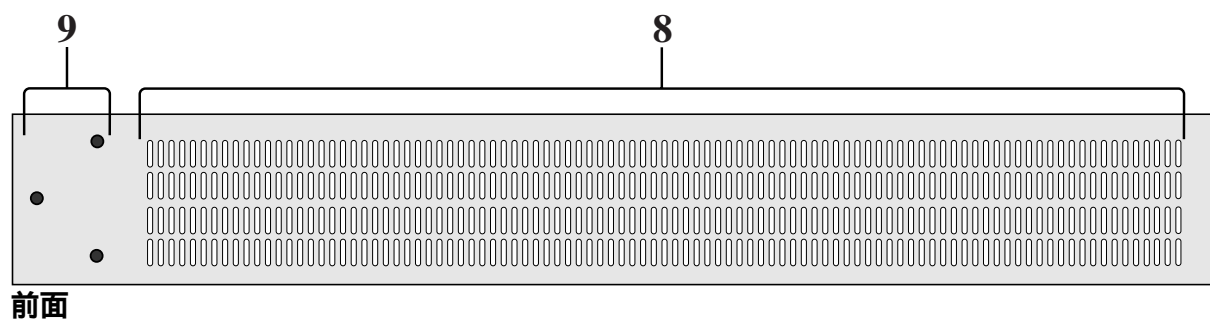
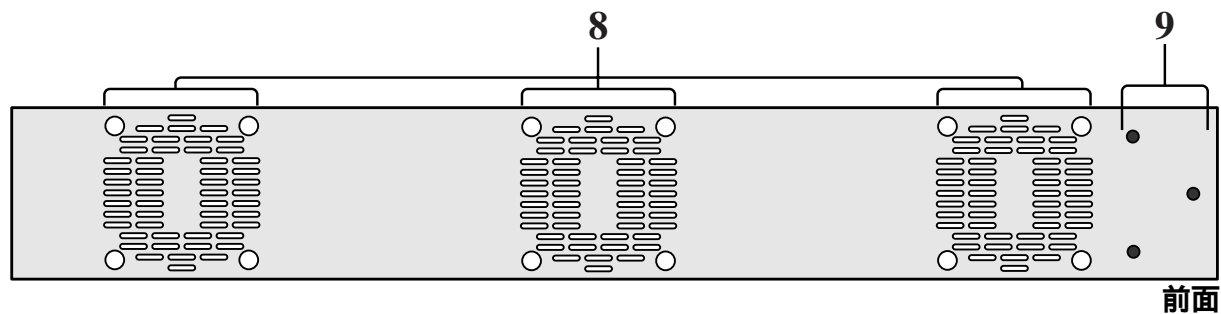
6. 電源スイッチ

本体を起動、または停止させるためのスイッチです。電源を入れるには「**+**」側に、電源を切るには「**-**」側にします。

7. 電源コネクタ

電源ケーブル(ソケット側)を接続するためのコネクタです。

側面



8. 通気口

本体内部の熱を逃がし、空気の循環をよくするための通気口です。
通気口をふさいだり、周囲に物を置いたりしないでください。

9. ラック取付金具用ネジ穴

同梱のラック取り付け金具を本体に取り付けるためのネジ穴です。
19 インチラックへの取り付け方法については、p1-9「19 インチラックへ取り付ける場合」を参照してください。

5 設置


デスクの上などに設置する場合

1

前後にファンや通気口をふさぐものがなく、平らな安定した場所に設置します。
本製品には、あらかじめ底面の四隅にゴム足が貼り付けてあります。
ゴム足は本体を固定し、衝撃を吸収するクッションの役目をします。本製品をデスクの上などに設置する場合は、必ずゴム足を使用してください。
本製品を 19 インチラックに取り付ける場合は、ゴム足をはずしてください。

19 インチラックへ取り付ける場合

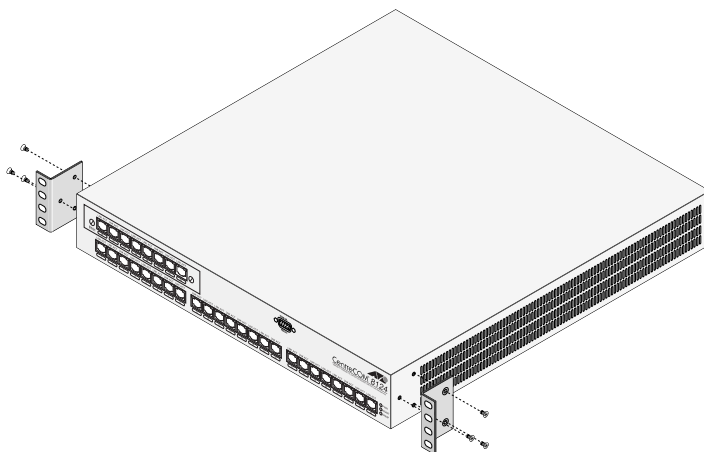
付属の取り付け金具を使って、EIA 規格の 19 インチラックに取り付けることができます。

本体背面の電源スイッチを「」(切)にします。

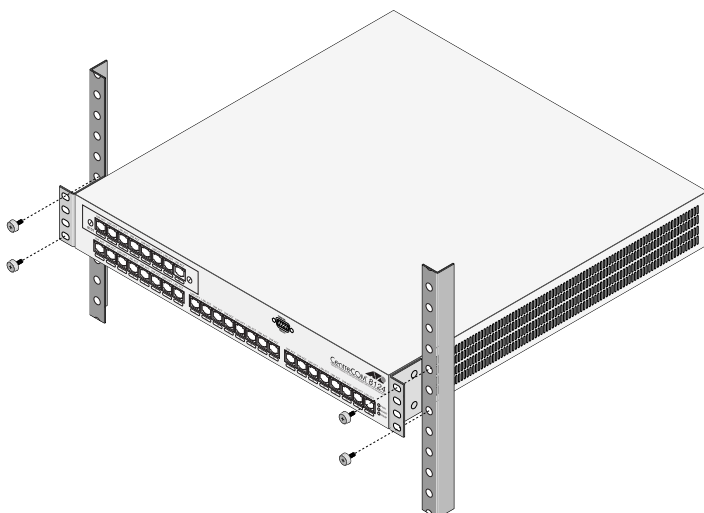
電源ケーブルや各メディアのケーブルをはずします。

本体底面の四隅に取り付けられているゴム足ははずします。

本体側面に付属の取り付け金具を合わせて、取り付け金具用ネジで両側にしっかりと固定します。



19 インチラックの希望する位置に本体を合わせて、ラックに付属しているネジでしっかりと固定します。



警告

取り付け金具および取り付け金具用ネジは必ず付属のものを使用し、19 インチラックに適切なネジで確実に固定してください。

固定が不十分な場合、落下などにより重大な事故が発生するおそれがあります。


6 拡張モジュールの装着手順

⚠ 警告

拡張モジュールの取り付け・取りはずし作業は、必ず、本体の電源を切って、電源ケーブルをぬいてから行ってください。感電のおそれがあります。

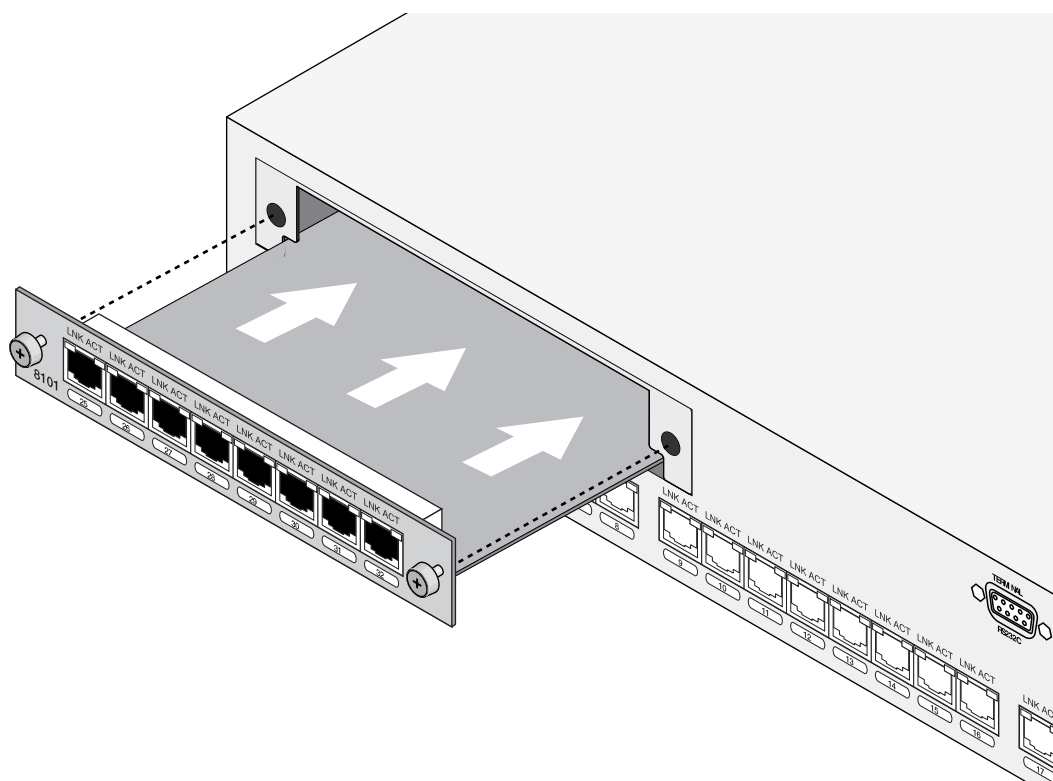
⚠ 注意

拡張モジュールは、静電気に非常に敏感な部品を使用しています。静電気によって、電子部品が損傷するおそれがありますので、取り扱いの際は、アースストラップを使用するなどの静電防止対策をして、ポート部分にはできるだけ手を触れないようにしてください。また、保管するときは、拡張モジュールが梱包されていた静電防止袋に入れて、静電気のある場所を避けてください。

本体背面の電源スイッチを「」(切)にし、電源ケーブルを抜きます。

本体前面スロットカバーのネジを完全にゆるめてから、スロットカバーをはずします。

拡張モジュールのコネクタ(96pinオス)が本体側のコネクタ(96pinメス)に正しく接続されるように、拡張モジュールを押し込みます。



拡張モジュール両端のネジを締め、拡張モジュールが本体に固定されたことを確認します。

電源ケーブルを接続します。

以上で、拡張モジュールの装着が完了しました。

拡張モジュールを取りはずす場合は、完全にネジをゆるてから、そのままネジを持ってゆっくり引き抜きます。

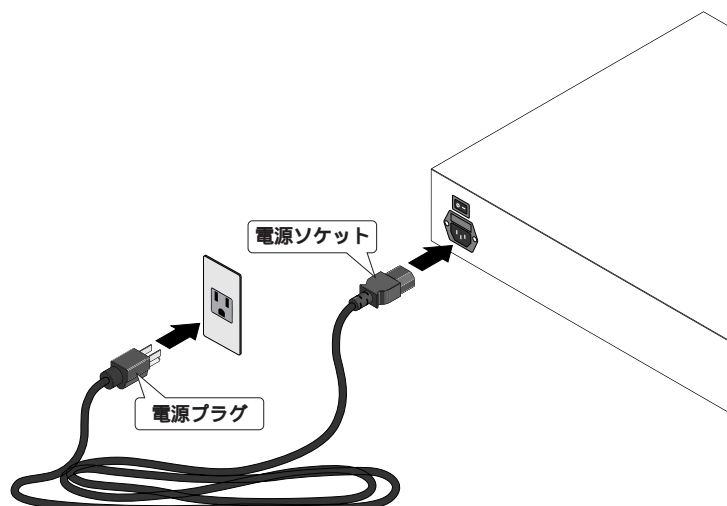
拡張モジュールを装着していないときは、拡張モジュール用スロットにスロットカバーを取り付けておいてください。

7 接続

電源ケーブルを接続する

付属の電源ケーブルを、図のように接続します。
最初に、電源ソケットを本体背面の電源コネクタに接続してから、次に電源プラグをコンセントにさし込みます。

電源スイッチをいれたまま、電源ケーブルを抜かないでください。



⚠ 警告

本製品付属の電源プラグはAC100V用です、AC100V、50/60Hzのコンセント以外には差し込まないでください。発熱による発火や感電の恐れがあります。

電源を入れる / 切る

電源ケーブルを接続します。

本体背面の電源スイッチを「」(入)にします。

電源を入れると、本体前面のPWR LEDが緑に点灯します。

電源を切る場合は、電源スイッチを「」(切)にします。

ネットワーク機器を接続する

UTP ケーブル

ケーブルは100BASE-TXの場合、**カテゴリ5**のUTPケーブル、10BASE-Tの場合は、**カテゴリ3以上**のUTPケーブルを使用します。

100BASE-TXにアップグレードするときに、余分な経費やトラブルが発生するのを避けるため、最初からカテゴリ5のケーブルをご使用になることをお勧めします。

UTP ケーブルには**ストレートタイプ**と**クロスタイプ**があります。

本製品とPCやワークステーションなどの端末(MDIポート)を接続する場合は、**ストレートタイプ**を使用してください。

また、本製品とリピータやスイッチ(MDI-Xポート)接続する場合は、**クロスタイプ**を使用してください。

本製品と端末を接続するケーブルの長さ、また、本製品とリピータやスイッチを接続するケーブルの長さはすべて100m以内です。

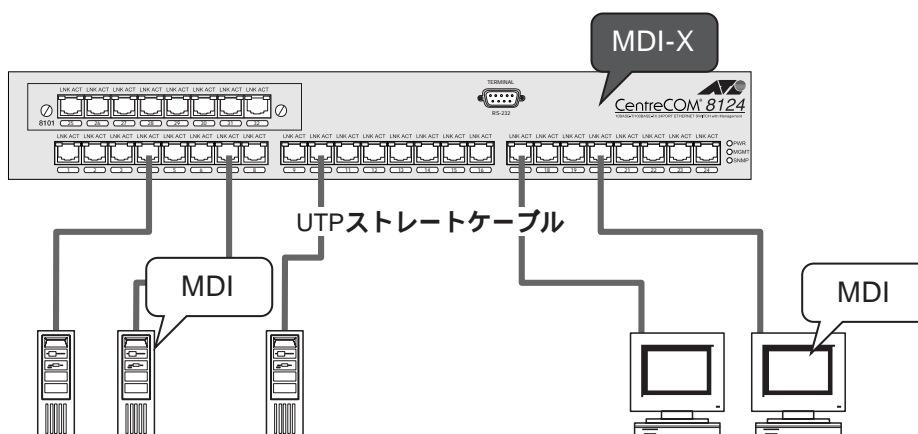
スタンドアロンで使用する場合

単純なスタンドアロンの環境で使用します。

ケーブルは100BASE-TXの場合、**カテゴリ5**のUTPケーブル、10BASE-Tの場合は、**カテゴリ3以上**のUTPケーブルを使用してください。

本製品と端末間のUTPケーブルの長さは、100m以内です。

本製品と端末(MDIポート)間のUTPケーブルは、**ストレートタイプ**を使用してください。



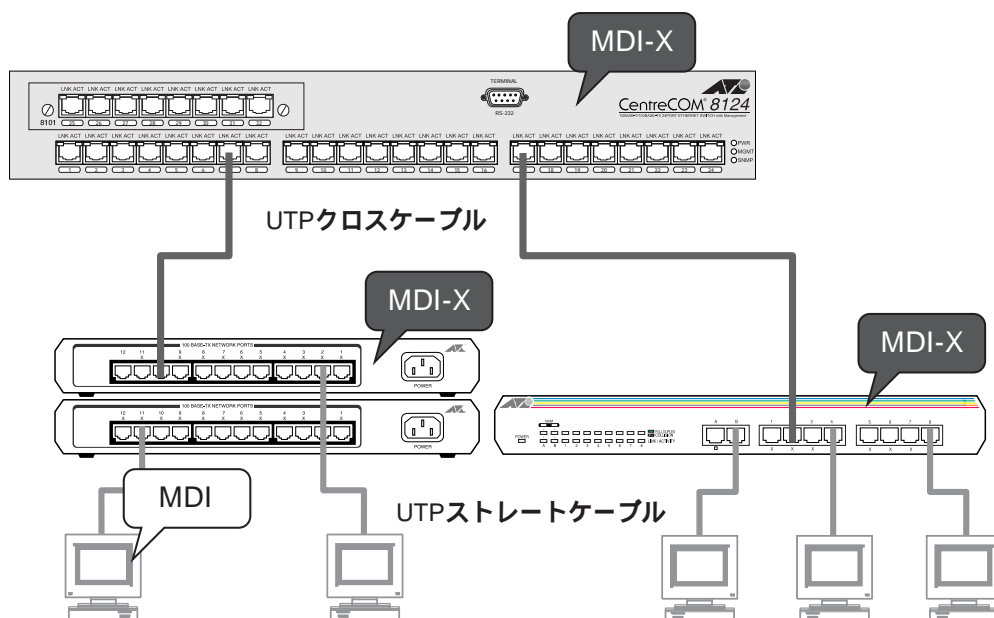
カスケード接続をする場合

本製品同士、または本製品とその他のスイッチやリピータをカスケード接続します。スイッチ同士のカスケード接続は、カスケードできる数に理論上の制限がありません。そのため、用途に合わせてネットワークを拡張することができます。(ただし、カスケードの段数は、ネットワーク上で動作しているアプリケーションのタイムアウトによって制限されることがあります。)

ケーブルは100BASE-TXの場合、カテゴリ5のUTPケーブル、10BASE-Tの場合は、カテゴリ3以上のUTPケーブルを使用します。

本製品とリピータやスイッチ間のUTPケーブルの長さは、100m以内です。

本製品とリピータやスイッチ(MDI-Xポート)間のUTPケーブルは、クロスタイプを使用します。

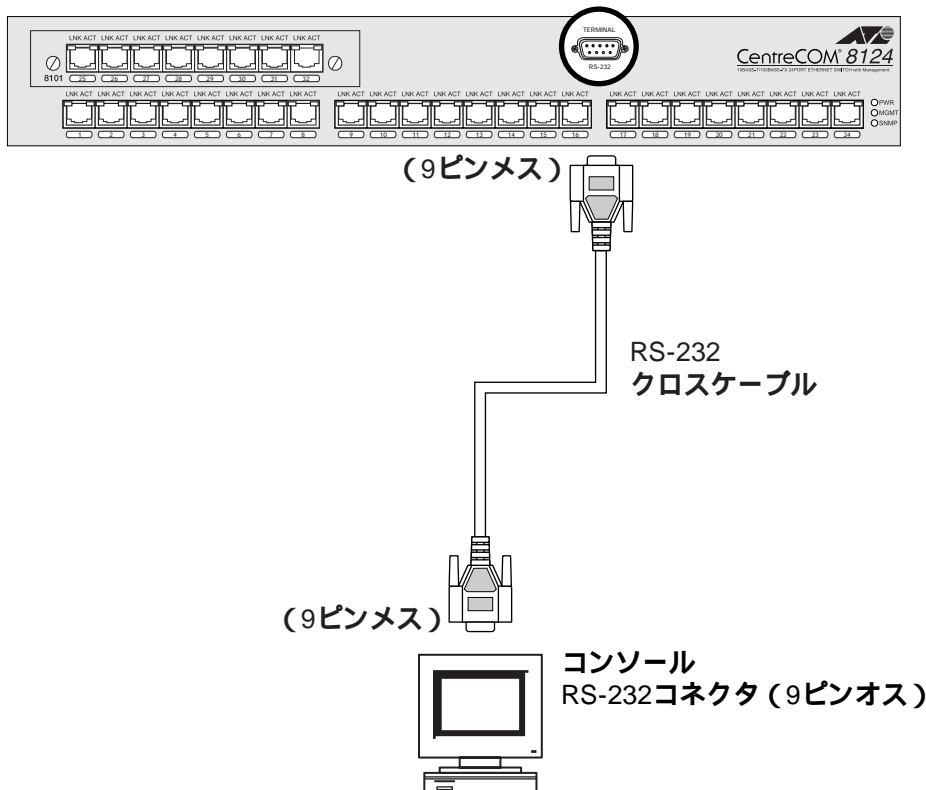


コンソールを接続する

付属の RS-232 クロスケーブルを、図のように接続します。
CLK (コマンドラインインターフェイス) を使ってパラメータの設定や、各機能の設定を行う場合は、RS-232 クロスケーブルで、本体前面のターミナルポートとコンソール側の RS-232 コネクタを接続してログインします。
コンソールは、VT100 互換のターミナルエミュレータを実行する RS-232 コネクタ付き PC およびワークステーション、または VT100 互換の RS-232 コネクタ付き非同期ターミナルをご使用ください。

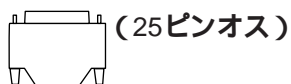
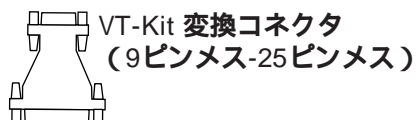
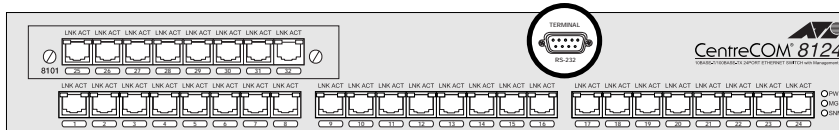
ターミナルの設定については次の章で説明します。

ターミナルポート (9ピンオス)

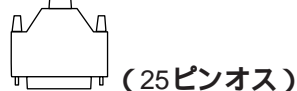


付属のRS-232 クロスケーブルは、DOS/V 機専用です。
 DOS/V 機以外の製品(NEC 製 PC-9800 SERIES など)をコンソールとする場合は、弊社 VT-kit(RS-232 ストレートケーブルとチェンジャーのセット商品)をご使用になり、下図のように接続を行ってください。

ターミナルポート (9ピンオス)



VT-Kit RS-232 ストレートケーブル



コンソール (NEC製 PC-9800 SERIES)
 RS-232コネクタ (25ピンメス)

* ご使用のコンソールのコネクタに合わせて、
 変換コネクタを使用してください。

2

CLI の操作

この章では、CLI(コマンドラインインターフェイス)をご使用いただく前に必要なターミナルソフトの設定、Telnetからのログイン方法、CLIの操作方法について説明します。

1 操作の流れ

STEP1 コンソールを接続する

付属のRS-232クロスケーブルで、本体前面のターミナルポートとコンソール側のRS-232コネクタを接続します。(p1-15)

STEP2 ターミナルソフトを設定する

コンソール側のターミナルおよびターミナルエミュレーションソフトの設定を、本製品のインターフェイス仕様に合わせて設定します。(p2-3)
ネットワーク経由でリモートからログインする場合は、Telnetの設定を行います。(p2-6)

STEP3 ログインする

「ユーザ名」と「パスワード」を入力してログインします。ユーザ名およびパスワードのデフォルトは設定されていません。

Please Login

username: ... と表示されたら、ユーザ名を入力して、 を押します。
password: ... と表示されたら、 を押します。パスワードを設定しているときは、ここでパスワードを入力します。
入力できる文字数は、いずれも半角英数字 20 文字以内です。

パスワードが間違っている場合は、
INVALID PASSWORD と表示され、すぐに
username: のラインに戻ります。

STEP4 構成定義を設定する

各項目の構成定義を設定します。(p3-2)

SYS_console> ... この状態でコマンドを入力します。(プロンプトはデフォルト表示)

Telnet 経由でログインしている場合は、
SYS_telnet> と表示されます。(プロンプトはデフォルト表示)

STEP5 ログアウトする

コンソールでの操作が終わったら、ログアウトします。
SYS_console>logout ... 「logout」と入力します。

Telnet 経由でログインしていた場合は、Telnet のセッションが終了します。

2 ターミナルソフトの設定

PC(ワークステーション)をターミナルとして使用するためのターミナルエミュレーション・ソフトウェアとして、次の3つの設定方法を説明します。

Windows 3.1 標準プログラム「ターミナル」
Windows 95/NT 標準プログラム「ハイパーターミナル」
弊社 VTERM

Windows 3.1 の「ターミナル」の設定手順

Windows 3.1 が動作する PC では、ターミナルエミュレーション・ソフトウェアとして標準装備の「ターミナル」(Terminal.exe)を使用することができます。

[プログラムマネージャ]-[アクセサリ]内の「ターミナル」をダブルクリックして起動します。

[設定]メニューから[通信条件]を選択すると、「通信条件の設定」ダイアログボックスが表示されます。次のように設定して [OK] ボタンをクリックします。

通信速度: 9600
データ長: 8
パリティ: なし
ストップビット: 1
フロー制御: Xon/Xoff
シリアルポート: COM1

[設定]メニューから[端末の設定]を選択すると「端末の設定」ダイアログボックスが表示されます。[ファンクションキー、方向キー、コントロールキーを端末側で使用]チェックボックスにチェックして [OK] ボタンをクリックします。

ここで説明していない個所については、特に設定する必要はありません。

[設定]メニューから[端末エミュレーション]を選択すると、「端末エミュレーションの選択」ダイアログボックスが表示されます。[VT-100 互換]を選択して [OK] ボタンをクリックします。

[電話]メニューから[ダイアル]を選択し、電話番号を指定せずに [OK] ボタンをクリックします。

以上で、設定が終了しました。本体に電源を入れると、ログイン画面が表示されます。

2 ターミナルソフトの設定

Windows 95/NTの「ハイパーターミナル」の設定手順

Windows 95/NTが動作するPCやワークステーションでは、ターミナルエミュレーション・ソフトウェアとして標準装備の「ハイパーターミナル」(Hypertrm.exe)を使用することができます。

Windows 95 [スタート]メニューの中から[プログラム]-[アクセサリ]-[ハイパーターミナル]を選択して、ハイパーターミナルフォルダ内の「Hypertrm.exe」をダブルクリックして起動します。

Windows NT [スタート]メニューの中から[プログラム]-[アクセサリ]-[ハイパーターミナル]-[ハイパーターミナル]を選択して、起動します。

「接続の設定」ダイアログボックスで、適切な名前を入力し、アイコンを選んで[OK]ボタンをクリックします。

モデムのインストールをするかどうかを問うダイアログボックスが表示された場合は、[いいえ]をクリックします。

Windows 95 「電話番号」ダイアログボックスが表示されます。[接続方法]の欄で、[COM1へダイレクト]を選択して、[OK]ボタンをクリックします。

Windows NT 「接続の設定」ダイアログボックスが表示されます。[ポートの設定]タブの[接続方法]の欄で、[COM1]を選択して、[OK]ボタンをクリックします。

[COM1のプロパティ]ダイアログボックスが表示されます。下図のように設定して、[OK]ボタンをクリックします。


ビット/秒:	9600
データビット:	8
パリティ:	なし
ストップビット:	1
フロー制御:	Xon/Xoff

「XXXX-ハイパーターミナル」のような、で設定した名称のウィンドウが表示されます。[ファイル]メニューの中から[プロパティ]を選択すると、「XXXXのプロパティ」ダイアログボックスが表示されます。[設定]タブで「エミュレーション」の項目を自動検出と設定して、[OK]ボタンをクリックします。

以上で設定が終わりました。

本体に電源を入れると、ログイン画面が表示されます。

VTTERM の設定手順


弊社VTTERM(VT-Kit)をご使用の場合、DOSプロンプトから次のコマンドを入力して  を押します。

```
C:\¥>VTTERM
```

VTTERM が起動し、初期画面が表示されます。

VTTERMのデフォルトの設定は、本製品の通信条件を満たしていますので、特に設定をする必要はありません。

本体に電源を入れると、ログイン画面が表示されます。

本体に電源がすでに入っている場合は、  を数回押すと、ログイン画面が表示されます。

3 Telnet でログインする

Telnet を使用すると、リモートでコンソール操作を行うことができます。ここでは、ネットワーク上の端末から Telnet で接続してログインする方法として、次の3つの設定方法を説明します。

Windows 95/NT 標準 Telnet アプリケーション「TELNET」
弊社「CentreNET PC/TCP」の「wvtn」(Windows 3.1)
弊社「CentreNET PC/TCP」の「vtn」(MS-DOS)

同時に5つまでの Telnet セッションを開くことができます。(コンソールターミナル + Telnet セッションで合計6つの CLI アクセスが可能。)

各セッションから同時にコマンドを実行することができますので、運用時にはご注意ください。

セッションのタイムアウトは5分(固定)です。5分以内にキー入力がない場合は、自動的にセッションが終了します。

Telnet からログインする場合は、あらかじめコンソールターミナルから IP アドレスを設定しておく必要があります。IP アドレスの設定方法については第3章「コマンドリファレンス」の「4 IP コマンド」の節を参照してください。

Windows 95/NT の「TELNET」の設定手順

Windows 95/NT は、TCP/IP プロトコルを実装していますので、Windows 95/NT が動作する PC、およびワークステーションでは、標準 Telnet アプリケーション「TELNET」(Telnet.exe)を使用することができます。

ネットワークに合わせて TCP/IP プロトコルの環境設定を行います。

Windows 95 の TCP/IP サポートの環境設定 [スタート]メニューから [設定]-[コントロールパネル]で「コントロールパネル」を開いて「ネットワーク」をダブルクリックし、[ネットワークの設定]タブのリストから [TCP/IP] を選択して [プロパティ] ボタンをクリックして行います。

Windows NT の TCP/IP サポートの環境設定 [スタート]メニューから [設定]-[コントロールパネル]で「コントロールパネル」を開いて、「ネットワーク」をダブルクリックし、[プロトコル]タブのリストから [TCP/IP プロトコル] を選択して [プロパティ] ボタンをクリックして行います。

それぞれの製品に添付されているマニュアルをご覧になり、IP アドレスなどを正しく設定してください。

Windows 95 「エクスプローラ」から、[Windows]フォルダ内の「Telnet.exe」をダブルクリックして、「Telnet.exe」を起動します。

Windows NT 「Windows NT のエクスプローラ」から、[WINNT] \ system32]フォルダ内の「telnet」をダブルクリックして、「telnet」を起動します。

[ターミナル]メニューから [設定] を選択すると、[ターミナルの設定] (基本設定の変更) ダイアログボックスが表示されます。

[エミュレーション] 欄で [VT-100/ANSI] ラジオボタンをクリックします。ターミナルオプションの [ローカルエコー] チェックボックスがチェックされている場合は、チェックをはずしてください。

[接続]メニューから [リモートシステム] をクリックすると、「接続」ダイアログボックスが表示されます。次のように設定して [接続] ボタンをクリックします。

ホスト名:	あらかじめ設定してある IP アドレスを入力します。
ポート:	telnet
ターミナルの種類:	v100

以上で、設定が終わりました。セッションが確立し、ログイン画面が表示されます。

CentreNET PC/TCP の設定手順

通常の MS-DOS パソコンおよび Windows 3.1 環境で Telnet を使用する場合は、TCP/IP 通信ソフトが必要です。

TCP/IP 通信ソフトがインストールされていない場合は、マニュアルをご覧になりインストールを行ってください。

ここでは、弊社 CentreNET PC/TCP をご使用の場合の接続方法を説明します。(あらかじめ、PC/TCP がインストールされているものとして説明を進めます。)

CentreCOM PC/TCP には、Windows 3.1 環境で動作する「Wvtn」と MS-DOS 環境で動作する「vtn」の 2 つの Telnet コマンドがあります。

Wvtn

[プログラムマネージャ] - [PCTCPWIN] 内の [Wvtn] を起動します。

[セッション] - [新規作成] で [セッション情報] ダイアログボックスが表示されます。

[ホスト名] にあらかじめ設定してある IP アドレスを入力します。

ここで説明していない個所については、特に設定する必要はありません。

以上で、設定が終了しました。セッションが確立し、ログイン画面が表示されます。

vtn

MS-DOS プロンプトが表示されていることを確認します。

次のコマンドを入力して を押します。

```
C:¥>vtn
```

次のようにホスト名を入力するためのプロンプトが表示されます。

あらかじめ設定してある IP アドレスを入力して を押します。

```
Host Name:
```

以上で、設定が終了しました。セッションが確立し、ログイン画面が表示されます。

4 コマンドの操作方法

コンソールでの入力操作

コマンド入力時には、各キーを使って次のような操作ができます。

入力 : コマンドおよびパラメータをタイプ入力します。

Ctrl+**W** : カーソル位置の1つ前の文字を削除します。

BackSpace : カーソル位置の1つ前の文字を削除します。

Ctrl+**U** : 入力したライン上(1行)のすべての文字を削除します。

Enter : コマンドを実行、保存します。

! または **Ctrl**+**P** : 最後に入力したコマンドに戻ります。繰り返しキーを押すごとに1つ前のコマンドへと戻ります。

#+**Enter** : コマンドの履歴を番号順にリスト表示します。

例

```
SYS_console> # Enter
1: console
2: banner
3: console
4: help-kbd
SYS_console>
```

履歴のリストから、再実行したいコマンドの番号を **#** の後に入力して **Enter** を押し、そのコマンドが実行されます。

例

```
SYS_console> #2 Enter

*****
*
*       CentreCOM 8124
*
*       Allied Telesis/Allied Telesyn
*
*****

SYS_console>
```

? : プロンプトの後に **?** を入力すると、9種類のコマンドグループの見出しが、簡単な説明とともにリスト表示されます。

例

```

SYS_console> ?
Commands groups are:
-----
console           Console related commands
system            System related commands
ip                IP related commands
snmp              SNMP related commands
switch-db         Switching Database related commands
vlan              Virtual LANs related commands
port-cfg          Port Configuration related commands
statistics        Switching Statistics related commands
sp-tree           Spanning Tree related commands
-----
use! for preve. cmd, ^U to clear line, ^W to clear previous word
-----
SYS_console>

```

リストの中から、見出しの1つを入力して **↵** を押すと、そのグループに属するすべてのコマンドが簡単な説明とともに表示されます。

例

```

SYS_console> console ↵
-----
help-kbd          lists the console functional keys
bannder           display bannder
clear             clear screen
login            exit the Admin Interface
logout           exit the Admin Interface and any Telnet session
set-page         set console page
set-prompt       change the console prompt
set-attr-prompt  set prompt attributes
set-attr-msg     set message attr ibutes
set-attr-text    set text attributes
set-passwd       chage the console password
-----
SYS_console>

```

command+[?] : パラメータ入力が必要なコマンドのコマンド名の後に [?] を入力するとコマンドと各パラメータの簡単な説明が表示されます。

例

```
SYS_console> ping ?
?
ping          IP traffic generator
               [arg #0] destination IP address
               [arg #1] number of packets to send or 0 for endless ping
SYS_console> ping _
```

command-X [?] : コマンド名の途中までを入力し、続けて [?] を入力すると、入力した文字を含む(入力した文字で始まる)コマンドがリスト表示されます。

例

```
SYS_console> get-c?
?
command 'get-c' not found

                                Commands matching <get-c>
-----
get-com                show current read or/and write community
get-con-matrix         retrieves the VLAN connectivity matrix
get-colls-cnt          gets the collision distribution counters per port
SYS-console> get-co
```

Tab

: コマンドの途中までを入力し、続けて**Tab**を押すと、コマンドを最後まで表示します。

ただし、コマンドを1つに限定するまでの文字を入力する必要があります。複数のコマンドが存在する場合には、**Tab**を押してもカーソルは移動しません。

例えば、「pi」と入力して**Tab**を押してみます。

```
SYS_console> pi Tab
```

すぐに同じライン上(行)に「ping」と表示されます。

```
SYS_console> ping
```

「p」と入力して**Tab**を押してみるとカーソルは同じ位置にあるままです。

これは、「ping」以外に「p」で始まるコマンドがあるからです。

```
SYS_console> p_
```

表示データが複数ページにわたる場合

コマンドの実行によって表示されるデータが、複数ページにわたるような場合は、画面下に次のように表示されます。

```
--Hit any key for more. . . ('q' for quit, Esc-for paging cancel)
```

各キーを使って次のような操作ができます。

任意のキーを押す : 画面をスクロールさせる

Q

: 表示しきれないデータを残したまま終了し、プロンプト表示に戻る。

エラーメッセージについて

入力したコマンドやパラメータが間違っている場合は、ガイドメッセージやエラーメッセージが表示されます。

入力したコマンドが間違っている場合

```
SYS_console> pin ↵  
command ' pin ' not found
```

コマンドは正しいがパラメータの数字が間違っている場合

```
SYS_console> ping ↵  
too few arguments
```

5 コマンドの表記について

第3章「コマンドリファレンス」で説明しているコマンドの表記方法について説明します。

コマンドライン構文と表記の意味

コマンドやパラメータを次のような構文で記載しています。

構文

```
command <parameter> {switch1 | switch2}
```

- 2**
- command : コマンド名です。
- parameter : 引数です。
IPアドレスの場合は、xxx.xxx.xxx.xxxのように示します。このとき、xxxは、0 ~ 255までの10進数になります。
MACアドレスの場合は、xx-xx-xx-xx-xx-xxのように示します。このとき、xxは00 ~ FFの16進数になります。
- switch : スイッチです。
「英数字」または「英数字 <parameter>」の形式で示します。

```
get-comm {read | write | *}
```

このように表示されている場合、次の中から1つを選択入力することができます。

```
get-comm read  
get-comm write  
get-comm *
```

コマンド、パラメータ、スイッチの間には `[スペース]` を入力してください。
コマンド、パラメータ、スイッチはすべてタイプ入力する必要があります。
コマンドおよびパラメータは大文字 / 小文字を区別します。小文字で入力をしてください。

3

コマンドリファレンス

この章では、本製品で使用できるすべてのコマンドの機能とその設定方法について説明します。

1 コマンドについて

本製品のマネージメント機能を利用するには、構成定義およびパラメータの設定を行う必要があります。CL(コマンドラインインターフェイス)は、最初に使用する際に定義をしたり、一度定義された設定を変更したりする場合に使用されます。

コマンド構成

各コマンドを内容別に9つのグループに分けています。

コンソールコマンド(Console related commands)

ヘルプ、バナー(本製品のCLIロゴ)、コンソールパラメータのセットアップなどコンソールに関するコマンドグループです。

システムコマンド(System related commands)

リセット、ダウンロード、NVRAMのデフォルトイニシャルなどシステムに関するコマンドグループです。

IP コマンド(IP related commands)

IPアドレスのパラメータ設定、および情報表示などIPアドレスに関するコマンドグループです。

SNMP コマンド(SNMP related commands)

SNMPエージェントのパラメータ設定や、マネージメントおよびTrapのオプションなどに関するコマンドグループです。

データベースコマンド(Switching Database related commands)

MACアドレスによって特定される各データベースのマネージメントに関するコマンドグループです。

バーチャルLAN コマンド(Virtual LANS related commands)

バーチャルLAN の設定および情報表示するためのコマンドグループです。

ポート設定コマンド(Port Configuration related commands)

各ポートごとの動作モードの設定や、パラメータおよび情報表示などポートの設定に関するコマンドグループです。

統計情報コマンド(Switching Statistics related commands)

ポートおよびシステム全体の統計情報をオペレーションするためのコマンドグループです。

スパニングツリーコマンド(Spanning Tree related commands)

スパニングツリーのオペレーションに関するコマンドグループです。

コマンドライン一覧

各グループ別にコマンドを簡単な内容説明とともにリストします。

コンソールコマンド(Console Commands)

p 3 - 7

help-kbd	コンソールのファンクションキーをリストします。
banner	バナー(本製品のCLIロゴ)を表示します。
clear	画面表示を消去します。
login	ログイン画面に戻ります。(Telnetセッションはそのまま)
logout	ログアウトします。(Telnetセッションを切断)
set-page	コンソールのページを設定します。
set-prompt	コンソールのプロンプトを変更します。
set-attr-prompt	プロンプトの文字属性を設定します。
set-attr-msg	メッセージ表示の文字属性を設定します。
set-attr-text	入力テキストの文字属性を設定します。
set-passwd	コンソールのパスワードを設定します。

システムコマンド(System Commands)

p 3 - 12

sys-stat	システムステータスを表示します。
get-stst-level	セルフテストの有効/無効を表示します。
set-stst-level	セルフテストの有効/無効を設定します。
warm-reset	保存されたすべてのパラメータをリセットします。
cold-reset	本体をリセットします。
get-last-err	最後にリセットしたときの致命的エラーを表示します。
init-nvram	NVRAMをデフォルト設定にします。
get-sw-file	ソフトウェアのファイル名を検索・表示します。
set-sw-file	TFTPサーバからダウンロードするファイル名を設定します。
get-tftp-srvr	TFTPサーバのIPアドレスを検索・表示します。
set-tftp-srvr	TFTPサーバのIPアドレスを設定します。
set-tftp-mode	TFTPサーバのダウンロードモードを設定します。
get-tftp-mode	TFTPサーバのダウンロードモードを検索・表示します。
sw-dnld	TFTPサーバからのダウンロードを開始します。
set-fg-param	フレームジェネレータとして使用する場合のパラメータを設定します。
start-fg	フレームジェネレーションを開始します。
stop-fg	フレームジェネレーションを停止します。

IP コマンド (IP Commands)

p 3 - 19

get-ip	現在の IP アドレスを表示します。
set-ip	IP アドレスを設定します。
get-ip-cfg	現在の IP アドレス、ネットマスク、ブロードキャストアドレスを表示します。
set-ip-cfg	IP アドレス、ネットマスク、ブロードキャストアドレスを設定します。
clear-ip-cfg	NVRAM に保存されている IP アドレス、ネットマスク、ブロードキャストアドレスを消去します。
get-gatew	デフォルトゲートウェイを表示します。
set-gatew	デフォルトゲートウェイを設定します。
get-arp-tbl	ARP テーブルを表示します。
del-arp-entry	ARP テーブルのエントリ / 全エントリ(*)を消去します。
add-arp-entry	ARP テーブルにエントリを追加します。
ping	Ping (IP トラフィックジェネレータ)を開始します。
ping-stop	Ping を停止します。

SNMP コマンド (SNMP Commands)

p 3 - 27

get-comm	現在のコミュニティ(read および read/write)を表示します。
set-comm	コミュニティ(read および read/write)を変更します。
get-auth	認証 Trap の有効 / 無効を表示します。
set-auth	認証 Trap の有効 / 無効を設定します。
get-traps	Trap テーブル(リスト)の管理ステーションを表示します。
add-trap	Trap テーブル(リスト)に管理ステーションを追加します。
del-trap	Trap テーブル(リスト)から管理ステーションを削除します。
get-rmon-state	RMON 管理機能によって制御される各項目のしきい値を表示します。

データベースコマンド (Switching Database Commands) p 3 - 31

get-lt-entry	指定したインデックスのエントリ情報を表示します。
get-lt-16	指定したインデックスから 16 個分のエントリ情報を表示します。
find-lt-addr	指定した MAC アドレスがエントリされているか検索・表示します。
del-lt-entry	指定したインデックスのエントリを削除します。
del-lt-addr	指定した MAC アドレスのエントリを削除します。
add-lt-entry	指定した MAC アドレスとポート番号のエントリを追加します。

バーチャル LAN コマンド (Virtual LAN Commands)

p 3 - 36

get-con-matrix	現在の VLAN 設定状況をマトリックス表示します。
set-vbc-domain	バーチャルブロードキャストドメインを設定します。
del-vbc-domain	設定したバーチャルブロードキャストドメインを削除します。
get-vbc-tbl	バーチャルブロードキャストドメインテーブルを表示します。
get-vbc-matrix	現在のバーチャルブロードキャストドメイン設定状況をマトリックス表示します。
set-sec-vlan	セキュリティ VLAN を設定します。
del-sec-vlan	設定したセキュリティ VLAN を削除します。
get-svlan-tbl	セキュリティ VLAN テーブルを表示します。
get-svlan-matrix	現在のセキュリティ VLAN 設定状況をマトリックス表示します。
set-mon-port	モニタポート (ミラーポート) を設定します。
monitor	指定したポートのモニタを開始します。
stop-mon	指定したポートのモニタを停止します。
get-nv-mon	NVRAM に保存したポートモニタ情報を表示します。
save-mon	ポートモニタ設定を NVRAM に保存します。
clear-nv-mon	保存されているポートモニタ情報を消去します。

ポート設定コマンド (Port Configuration Commands)

p 3 - 51

get-port-cfg	すべてのポートの現在の設定内容を表示します。
set-port-dplex	指定したポートの通信モード (full/ half duplex) を設定します。
set-grp-dplex	指定した複数ポートの通信モードを設定します。
set-speed-sel	指定したポートの通信速度 (asense/100Mbps/10Mbps) を設定します。
set-grp-speed	指定した複数ポートの通信速度を設定します。
set-port-state	イーサネットポートの有効 / 無効を設定します。

統計情報コマンド (Switching Statistics Commands)

p 3 - 56

clr-cnt	イーサネットおよびブリッジの統計カウンタを消去します。
get-eth-cnt	指定したポートのイーサネット統計情報を表示します。
get-colls-cnt	指定したポートのコリジョン統計情報を表示します。
get-rmon-cnt	指定したポートのイーサネット RMON 統計情報を表示します。
get-sdist-cnt	指定した 100Mbps ポートのバケットサイズ統計情報を表示します。
get-mgm-brcnt	システム全体の統計情報およびすべてのポートの送受信統計情報を表示します。

get-stp	現在およびリセット後のスパンニングツリー機能の有効/無効を表示します。
set-stp	リセット後のスパンニングツリー機能の有効 / 無効を設定します。
get-st-bcfg	スパンニングツリーのブリッジ機能の設定を表示します。
get-st-pcfg	スパンニングツリーのポートの設定を表示します。
get-st-syscfg	スパンニングツリーのすべてのポートの設定内容を表示します。
set-br-prio	スパンニングツリーパラメータのブリッジプライオリティを設定します。
set-br-maxage	スパンニングツリーパラメータの MaxAge を設定します。
set-br-hellot	スパンニングツリーパラメータの Hello Time を設定します。
set-br-fwddel	スパンニングツリーパラメータのフォワードディレイタイムを設定します。
set-prt-prio	スパンニングツリーパラメータのポートプライオリティを設定します。
set-prt-enb	スパンニングツリーポートの有効 / 無効を設定します。
set-prt-pcost	スパンニングツリーパラメータのパスコストを設定します。

2 コンソールコマンド

コンソールコマンドはCLI(コマンドラインインターフェイス)関連情報の表示や、CLIの表示をユーザが独自に変更および設定するためのコマンドです。

コンソールコマンドを一覧するには、`console` と入力して[Enter]を押してください。

help-kbd

コンソールのファンクションキーを簡単な説明とともにリスト表示します。

構文

`help-kbd`

例

```
SYS_console>help-kbd
help-kbd
-----
^U (or Escape) - clear the line
^W              - clear the previous word
! or ^P        - for previous command
TAB            - for command completion
?              - help, depending on position:
                  in 1st column - list of the categories
                  in command   - list of the completions
                  in parameters - list of the parameters
#              - with line number - repeat command from history,
                  for example: #26
                  without line number - show history list
-----
SYS_console>
```

画面表示の「^」記号は、[Ctrl]キーを示します。

banner

本製品のCLIロゴを表示します。

構文

`banner`

例

```
*****
*
*       CentreCOM 8124
*
*       Allied Telesis/Allied Telesyn
*
*****
```

clear

画面を消去し、1行目にプロンプトを表示し直します。

画面上のテキストを消去するだけですので、設定した内容などは消去されません。

構文

```
clear
```

login

Telnetセッションを切断せずに、ログイン画面に戻ります。

TelnetセッションでCLIを利用している場合、再接続をせずにパスワードをチェックすることができます。

構文

```
login
```

例

```
Please Login
username:_
```

logout

CLIのすべてのセッションを終了します(ログアウトします)。

再びCLIを使用するには、どのようなアクセス方法でも、再接続をしてログインする必要があります。

構文

```
logout
```

例

```
SYS_console>User logged out!!!
You will need to reconnect.
```

set-page

画面1ページ分に表示する行数を設定します。

構文

```
set-page <line>
```

パラメータ

line

1ページに表示する行数を5～127の数字で入力します。

例

```
SYS_console>set-page 100
set-page 100
Page size was set to 100
SYS_console>
```

set-prompt

コマンドラインのプロンプトを変更します。

部署名やロケーションなど、プロンプトをより意味のある名称に設定することができます。

デフォルトのプロンプトはSYS_console(Telnetセッションの場合は、SYS_telnet)です。

構文

```
set-prompt <new_prompt>
```

パラメータ

new_prompt 変更後の名称を入力します。

例

```
SYS_console>set-prompt R&D_5F>
R&D_5F>
R&D_5F>
```

Telnetセッションはコンソールターミナル使用時に同時に5つまで開くことができます。プロンプト名は各セッションごとに設定できます。

set-attr-prompt

プロンプトの文字属性を設定します。

ご使用の環境によっては、文字属性の設定が有効にならない場合があります。

構文

```
set-attr-prompt <number of option>
```

パラメータ

number of option	変更後の文字属性の番号を入力します。
0	normal(標準)
1	bold(太字)
2	underline(下線)
4	blink(点滅)
8	reverse(反転・ハイライト)

例

```
SYS_console>set-attr-prompt 2
set-attr-prompt 2
SYS_console>
```

set-attr-msg

画面に表示されるエラーメッセージや、ガイドメッセージの文字属性を設定します。

ご使用の環境によっては、文字属性の設定が有効にならない場合があります。

構文

```
set-attr-msg <number of option>
```

パラメータ

number of option	変更後の文字属性の番号を入力します。
0	normal(標準)
1	bold(太字)
2	underline(下線)
4	blink(点滅)
8	reverse(反転・ハイライト)

例

```
SYS_console>set-attr-msg 2
set-attr-msg 2
SYS_console>set 例として、存在しないコマンド'set'を入力してみる。
set
command 'set' not found
SYS_console>
```

set-attr-text

コマンドやパラメータなど、ユーザが入力する(入力した)テキストの文字属性を設定します。

ご使用の環境によっては、文字属性の設定が有効にならない場合があります。

構文

```
set-attr-text <number of option>
```

パラメータ

number of option	変更後の文字属性の番号を入力します。
0	normal(標準)
1	bold(太字)
2	underline(下線)
4	blink(点滅)
8	reverse(反転・ハイライト)

例

```
SYS_console>set-attr-text 2
set-attr-text 2
SYS_console>set 例として、存在しないコマンド'set'を入力してみる。
set
command 'set' not found
SYS_console>
```


set-passwd

CLIにログインする際に要求されるパスワードを設定します。

現在使用しているパスワードを、半角英数字20文字以内で入力後、新規に設定したいパスワードを入力します。

新規パスワードは確認のため再入力が必要です。

入力したパスワードは画面には表示されません。

変更されたパスワードは、ただちに本体のNVRAMに保存され、有効となります。新しいパスワードの設定後にログアウトして、再度ログインする場合は、新しいパスワードを入力する必要があります。

Telnet経由でパスワードを変更することはできません。

セキュリティ保護のためパスワードは必ず設定してください。また、管理者はパスワードの管理・保護にご注意ください。

構文

```
set-passwd
```

例

通常の場合

```
SYS_console>set-passwd
SYS_console>
  Enter old password:

  Enter new passowrd:

  Enter new password again:

  CLI running password changed
  CLI password change in the NVRAM OK

SYS_console>
```

古いパスワードを間違えて入力したり、新しいパスワードの確認入力が間違っている場合

```
SYS_console>set-passwd
SYS_console>
  Enter old password:

  Enter new passowrd:

  Enter new password again:

Error: different new passwords
```

3 システムコマンド

システムコマンドは本製品のシステム全体に関するパラメータや、ソフトウェアのダウンロードに必要なパラメータの設定・表示を行うためのコマンドです。

システムコマンドを一覧するには、`system` と入力して  を押してください。

sys-stat

本製品のハードウェア・ソフトウェア部分に関する固有の情報、およびインターフェイスの状態を示す一般的な情報を表示します。

- ・ 製品名
- ・ ソフトウェアのバージョンおよびそのリリース日
- ・ SNMP オブジェクト ID
- ・ MAC アドレス
- ・ スイッチングデータベースのエントリ数
- ・ 最後に電源を入れたときから現在までの時間 (1/100 秒)
- ・ 最後に電源を入れたときから現在までの時間 (日数、時間 /hh:分/mm:秒/ss)
- ・ ポート別の内容およびステータス表示

構文

```
sys-stat
```

例

```
SYS_console>sys-stat
sys-stat
CentreCOM 8124
SNMP Agent Software - Version 1.02 Tue Jul 28 16:13:08 1998
SNMP Object ID is : < 1.3.6.1.4.1.207.1.4.27 >
System MAC Address : 00-00-F4-9C-00-60
Switching Data Base Size: 8192 entries
Total uptime(hundredths of seconds ): 57625800
Total uptime(days, hh:mm:ss format): 6 days, 16:04:18.00

i/f 1 -- description [Port 1 - 10/100 BaseTx ETHERNET Port] -- status [UP]
i/f 2 -- description [Port 2 - 10/100 BaseTx ETHERNET Port] -- status [UP]
i/f 3 -- description [Port 3 - 10/100 BaseTx ETHERNET Port] -- status [UP]
i/f 4 -- description [Port 4 - 10/100 BaseTx ETHERNET Port] -- status [UP]
i/f 5 -- description [Port 5 - 10/100 BaseTx ETHERNET Port] -- status [UP]
i/f 6 -- description [Port 6 - 10/100 BaseTx ETHERNET Port] -- status [UP]
i/f 7 -- description [Port 7 - 10/100 BaseTx ETHERNET Port] -- status [UP]
i/f 8 -- description [Port 8 - 10/100 BaseTx ETHERNET Port] -- status [UP]
i/f 9 -- description [Port 9 - 10/100 BaseTx ETHERNET Port] -- status [UP]
i/f 10 -- description [Port 10 - 10/100 BaseTx ETHERNET Port] -- status [UP]
i/f 11 -- description [Port 11 - 10/100 BaseTx ETHERNET Port] -- status [UP]
i/f 12 -- description [Port 12 - 10/100 BaseTx ETHERNET Port] -- status [UP]
i/f 13 -- description [Port 13 - 10/100 BaseTx ETHERNET Port] -- status [UP]
i/f 14 -- description [Port 14 - 10/100 BaseTx ETHERNET Port] -- status [UP]
i/f 15 -- description [Port 15 - 10/100 BaseTx ETHERNET Port] -- status [UP]
```

```
i/f 16 -- description [Port 16 - 10/100 BaseTx ETHERNET Port] -- status [UP]
i/f 17 -- description [Port 17 - 10/100 BaseTx ETHERNET Port] -- status [UP]
i/f 18 -- description [Port 18 - 10/100 BaseTx ETHERNET Port] -- status [UP]
i/f 19 -- description [Port 19 - 10/100 BaseTx ETHERNET Port] -- status [UP]
i/f 20 -- description [Port 20 - 10/100 BaseTx ETHERNET Port] -- status [UP]
i/f 21 -- description [Port 21 - 10/100 BaseTx ETHERNET Port] -- status [UP]
i/f 22 -- description [Port 22 - 10/100 BaseTx ETHERNET Port] -- status [UP]
i/f 23 -- description [Port 23 - 10/100 BaseTx ETHERNET Port] -- status [UP]
i/f 24 -- description [Port 24 - 10/100 BaseTx ETHERNET Port] -- status [UP]
```

```
SYS_console>
```

get-stst-level

本体に電源を入れたときセルフテストを行う (Enable) が行わない (Disable) のレベルを表示します。

レベルは Disable (無効) または Enable (有効) の 2 つです。

構文

```
get-stst-level
```

例

```
SYS_console>get-stst-level
get-stst-level
Selftest is enable
SYS_console>
```

set-stst-level

本体に電源を入れたときセルフテストを行うか行わないかのレベルを設定します。

デフォルトは Enable です。

構文

```
set-stst-level {disable|enable}
```

パラメータ

disable	セルフテストを行わない場合は、disable と入力します。
enable	セルフテストを行う場合は、enable と入力します。

例

```
SYS_console>set-stst-level enable
set-stst-level enable
Device Selftest Level parameter change in the NVRAM OK
SYS_console>
```

warm-reset

ソフトウェアのリセットを行います。

本製品の各設定は、NVRAM に保存されるパラメータに従って変更されます。

このコマンドを実行すると、本体の電源を切らずに、NVRAM に保存された新しい設定で使用を再開することができ、統計カウンタも 0 にリセットされます。

構文

```
warm-reset
```

cold-reset

本体のリセットを行います。

本体の電源スイッチを切って、再び電源スイッチを入れ直した状態と同じような結果となります。

構文

```
cold-reset
```

get-last-err

本体のリセット(電源を切る、cold-reset)を実行してから、何回ソフトウェアのリセット(warm-reset)を行ったかを表示します。

また、本体のリセット(電源を切る、cold-reset)を実行してから、致命的なエラーが生じていた場合は、その情報を表示します。

構文

```
get-last-err
```

例

```
SYS_console>get-last-err
get-last-err
System information since the last hardware reset
-----
Software resets number : 2
The system never encountered a fatal error
SYS_console>
```

init-nvram

ソフトウェアのNVRAMに保存されたすべての設定値をクリアし、デフォルト値に戻します。

変更はリセット(warm-reset、cold-reset、または電源を切る)後に有効となります。

構文

```
init-nvram
```

get-sw-file

ソフトウェアのファイル名を検索し、表示します。
このファイル名はTFTPサーバからソフトウェアをダウンロードする際に使用します。

構文

```
get-sw-file
```

例

```
SYS_console>get-sw-file
get-sw-file
NVRAM based remote software file name is a24x102.hex
SYS_console>
```

set-sw-file

TFTPを使ってダウンロードするソフトウェアのファイル名を設定します。
ファイル名は、TFTPサーバに格納されているソフトウェアのファイル名と同じでなくてはなりません。

構文

```
set-sw-file <filename>
```

パラメータ

filename	TFTPサーバに格納されているソフトウェアと同じファイル名を入力します。
----------	--------------------------------------

例

```
SYS_console>set-sw-file a24x120.hex
set-sw-file a24x120.hex
remote software file name change in the NVRAM OK
remote software file name changed to <a24x120.hex>
SYS_console>
```

get-tftp-srvr

ソフトウェアのダウンロードに使用するTFTPサーバのIPアドレスを検索し、表示します。

構文

```
get-tftp-srvr
```

例

```
SYS_console>get-tftp-srvr
get-tftp-srvr
The IP address of the remote TFTP server is: 192.001.001.003
SYS_console>
```

set-tftp-srvr

ソフトウェアのダウンロードに使用する TFTP サーバの IP アドレスを設定します。

構文

```
set-tftp-srvr <IPaddress>
```

パラメータ

IPaddress	TFTP サーバの IP アドレスを入力します。 xxx.xxx.xxx.xxx 形式で、xxx は 0 ~ 255 までの 10 進数を入力します。
-----------	--

例

```
SYS_console>set-tftp-srvr 192.001.001.003
set-tftp-srvr 192.001.001.003
The remote TFTP server IP Address change in the NVRAM OK
The IP address of the remote TFTP server is: 192.001.001.003
SYS_console>
```

set-tftp-mode

ファイルのダウンロードモードをクライアントモード (client) またはサーバモード (server) に設定します。

クライアントモードに設定した場合は、リモートホストの TFTP サーバを起動して、sw-dnld コマンドを実行します。

サーバモードに設定した場合は、sw-dnld コマンドを実行して、リモートホストから TFTP コマンドを実行します。

構文

```
set-tftp-mode {client|server}
```

パラメータ

client	TFTP クライアントに設定する場合は、client と入力します。
server	TFTP サーバに設定する場合は、server と入力します。

例**クライアントを選択した場合**

```
SYS_console>set-tftp-mode client
set-tftp-mode client
Switch Tftp client is enabled for next download
SYS_console>
```

get-tftp-mode

現在のファイルのダウンロードモードを表示します。

ダウンロードモードはクライアントモード (client) またはサーバモード (server) です。

構文

```
get-tftp-mode
```

例

```
SYS_console>get-tftp-mode
get-tftp-mode
Tftp client will be operate on next software download
SYS_console>
```

sw-dnld

ソフトウェアのダウンロードを開始します。

ダウンロード元は set-tftp-srvr コマンドで設定したリモート TFTP サーバです。

ダウンロードするファイルは set-sw-file コマンドで設定したファイル名です。

ソフトウェアのダウンロードについては、第4章「付録」の「2 ソフトウェアのダウンロード」の節を参照してください。

構文

```
sw-dnld
```

set-fg-param

本製品をフレームジェネレータとして使用する場合の各設定を行います。

パケットを作成し、指定したポートに送信することによって故意にトラフィックを発生させます。送信先に設置してあるアナライザなどを利用して、通信状況を解析・表示することができます。

構文

```
set-fg-param <dest> <source> <fill_byte> <length>
```

パラメータ

dest	宛先の MAC アドレスを入力します。 xx-xx-xx-xx-xx-xx形式で、xxは00～FFまでの16進数になります。
source	送信元の MAC アドレスを入力します。 xx-xx-xx-xx-xx-xx形式で、xxは00～FFまでの16進数になります。
fill_byte	最初の12バイトを除く、パケット全体を満たすために使われる1バイトを入力します。
length	CRCエラーチェック値を除くパケットの全長を数字で入力します。

例

```
SYS_console>set-fg-param 00-00-F4-9C-80-01 00-00-F4-9C-11-22 aa 100
set-fg-param 00-00-F4-9C-80-01 00-00-F4-9C-11-22 aa 100
SYS_console>
```

start-fg

フレームジェネレーションを開始します。

パケットを送信する宛先のポート、各ポートに送信するパケット数、1秒間に発生させるパケット数を指定して、トラフィックを発生させます。

構文

```
start-fg <dport> <count> <rate>
```

パラメータ

dport	送信先のポート番号を入力します。 複数ポートの場合は、1-2-3-4... の形式でダッシュで区切ってリストにします。
count	各ポートに送信するパケット数を入力します。 0を入力した場合は、パケットを無限回送信します。
rate	1秒間に生成するパケット数を入力します。

例

```
SYS_console>start-fg 1-2-3 0 10  
start-fg 1-2-3 0 10  
SYS_console>
```

stop-fg

フレームジェネレーションを停止します。

構文

```
stop-fg
```


4 IP コマンド

IP コマンドはIP コンフィグレーションに関するコマンドです。
IP コンフィグレーションのセクション、Arp(Address Resolution Protocol)のセクション、Ping のセクションに分けて説明しています。
IP コマンドを一覧するには、ipと入力して[Enter]を押してください。

IP コンフィグレーション

get-ip

SNMP エージェントの現在の IP アドレスを表示します。

構文

```
get-ip
```

例

IP アドレスがすでに設定されている場合

```
SYS_console>get-ip
get-ip
The device IP Address is : 192.168.200.010
SYS_console>
```

IP アドレスがまだ設定されていない場合

```
SYS_console>get-ip
get-ip
The device has no IP address defined
SYS_console>
```

set-ip

SNMP エージェントの IP アドレスを設定します。

デフォルト値は何も設定されていません。

新しく設定したIPアドレスは、ただちに本体のNVRAMに保存され、有効となります。

すでに設定してある IP アドレスを変更した場合は、リセット(warm-reset、cold-reset、電源を切る)後に有効となります。

このコマンドで、IPアドレスを設定した場合、SNMPエージェントは自動的にサブネットマスク、ブロードキャストアドレスを設定します。

構文

```
set-ip <IPaddress>
```

パラメータ

IPaddress

IP アドレスを入力します。

xxx.xxx.xxx.xxx 形式で、xxx は 0 ~ 255 までの 10 進数を入力します。

例

```

SYS_console>set-ip 192.168.200.010
set-ip 192.168.200.010
Device IP address unchanged for this session
Device IP Address change in the NVRAM ok

After boot, the device IP will be:
IP address:      192.168.200.010
SYS_console>

```

get-ip-cfg

IPアドレス、サブネットマスク(IPネットマスク)、ブロードキャストアドレス(IPブロードキャスト)のすべてのIPコンフィグレーションを表示します。

構文

```
get-ip-cfg
```

例**IPコンフィグレーションがすでに設定されている場合**

```

SYS_console>get-ip-cfg
get-ip-cfg
The device IP address, netmask and broadcast are:
IP address      : 192.168.200.010
IP netmask      : 255.255.255.000
IP broadcast    : 255.255.255.255

```

```
SYS_console>
```

IPコンフィグレーションがまだ設定されていない場合

```

SYS_console>get-ip
get-ip-cfg
The device has no IP address defined
SYS_console>

```

set-ip-cfg

IPアドレス、サブネットマスク(IPネットマスク)、ブロードキャストアドレス(IPブロードキャスト)のすべてのIPコンフィグレーションを設定します。

デフォルト値は何も設定されていません。

新しく設定したIPアドレスは、ただちに本体のNVRAMに保存され、有効となります。

すでに設定してあるIPアドレスを変更した場合は、リセット(warm-reset、cold-reset、電源を切る)後に有効となります。

構文

```
set-ip-cfg <IPAddress> <netmask> <broadcast>
```

パラメータ

IPAddress	IP アドレスを入力します。 xxx.xxx.xxx.xxx 形式で、xxx は 0 ~ 255 までの 10 進数を入力します。
netmask	サブネットマスクを設定し、入力します。 xxx.xxx.xxx.xxx 形式で、xxx は 0 ~ 255 までの 10 進数を入力します。
broadcast	ブロードキャストアドレスを設定し、入力します。 xxx.xxx.xxx.xxx 形式で、xxx は 0 ~ 255 までの 10 進数を入力します。

例

IP コンフィグレーションがすでに設定されている場合

```
SYS_console>set-ip-cfg 192.168.200.010 255.255.255.0 255.255.255.255
192.168.200.010 255.255.255.0 255.255.255.255
Device IP address unchanged for this session
Device IP Address change in the NVRAM OK

The device NVRAM IP configuration will be:
IP address      : 192.168.200.010
IP netmask      : 255.255.255.000
IP broadcast    : 255.255.255.255
```

```
SYS_console>
```

IP コンフィグレーションがまだ設定されていない場合

```
SYS_console>set-ip-cfg 192.168.200.010 255.255.255.0 255.255.255.255
192.168.200.010 255.255.255.0 255.255.255.255
Device IP address set for this session
Device IP Address change in the NVRAM OK

The device NVRAM IP configuration will be:
IP address      : 192.168.200.010
IP netmask      : 255.255.255.000
IP broadcast    : 255.255.255.255
```

```
SYS_console>
```

clear-ip-cfg

NVRAM に保存されている IP コンフィグレーションを消去します。

構文

```
clear-ip-cfg
```

例

```
SYS_console>clear-ip-cfg
Device IP Configuration change in the NVRAM cleared OK
SYS_console>
```

get-gatew

デフォルトゲートウェイアドレスを表示します。

構文

```
get-gatew
```

例

```
SYS_console>get-gatew
get-gatew
The default gateway address is : 192.168.200.032
SYS_console>
```

set-gatew

デフォルトゲートウェイアドレスを設定します。

他の IP ネットワークまたはサブネットワークにパケット (SNMP Trap など) を送信する場合、ゲートウェイをこえて Telnet ログインなどを行う場合、他の IP ネットワークにアクセスするルータの IP アドレスを指定します。

デフォルト値は何も設定されていません。(000.000.000.000)

構文

```
set-gatew <IPaddress>
```

パラメータ

IPaddress

デフォルトゲートウェイアドレスを入力します。
xxx.xxx.xxx.xxx 形式で、xxx は 0 ~ 255 までの 10 進数を入力します。

例

```
SYS_console>set-gatew 192.168.200.032
set-gatew 192.168.200.032
Device Default Gateway change in the NVRAM OK
Device Default Gateway changed to : 192.168.200.032
SYS_console>
```

ARP(Address Resolution Protocol)コマンド

get-arp-tbl

ARPテーブルを表示します。

- ・インデックス(ポート番号)
- ・IPアドレス
- ・MACアドレス

構文

```
get-arp-tbl
```

例

```
SYS_console>get-arp-tbl

      IfIndex                IPAddress                MAC Address
      =====
          1                192.168.200.011        00-00-0C-0E-29-D8
SYS_console>
```

del-arp-entry

ARPテーブルからエントリを削除します。

特定のエントリをIPアドレスで指定して削除する方法と、すべてのエントリを削除する方法があります。

構文

```
del-arp-entry{<IPAddress>|*}
```

パラメータ

IPAddress	エントリを1件削除する場合は、そのIPアドレスを入力します。 xxx.xxx.xxx.xxx形式で、xxxは0～255までの10進数を入力します。
*	すべてのエントリを削除する場合は、*を入力します。

例

IPアドレスで指定した場合

```
SYS_console>del-arp-entry 192.168.200.011
del-arp-entry 192.168.200.011
  ARP Table Entry with IP Address <192.168.200.011> removed
SYS_console>
```

「*」ですべてのエントリを指定した場合

```
del-arp-entry *
  ARP Table Entry with IP Address <192.168.200.011> removed
  ARP Table flushed: 1 entries removed
SYS_console>
```

add-arp-entry

ARP テーブルにエントリを追加します。

構文

```
add-arp-entry <IPaddress> <mac_address> <Interface>
```

パラメータ

IPaddress	追加するエントリの IP アドレスを入力します。 xxx.xxx.xxx.xxx 形式で、xxx は 0 ~ 255 までの 10 進数を入力します。
mac_address	追加するエントリの MAC アドレスを入力します。 xx-xx-xx-xx-xx-xx 形式で、xx は 00 ~ FF までの 16 進数を入力します。
Interface	ポート番号を 1 ~ 24 までの 10 進数で入力します。

例

```
SYS_console>add-arp-entry 192.168.200.012 00-00-0C-0E-29-D8 1
ARP Table Entry succesfully added
SYS_console>
```

Ping コマンド

ping

接続機器との通信テストを IP レベルで行ます。

ICMP(Internet Control Message Protocol)エコーリクエストを、指定したホストに送信します。

1 秒間に 1 データグラムを送信します。何回データグラムを送信するかを設定することができます。

ホストからエコーレスポンスを受信した場合、エコーレスポンスごとに出力を行い、画面に表示します。エコーレスポンスがない場合は、出力は行われません。

Telnet 経由からは、Ping を実行することはできません。

送信回数を無限に設定することはお勧めいたしません。

途中で送信を中断する場合は、ping-stop コマンドを実行するか、**Ctrl**+**C**を押してください。

構文

```
ping <IPaddress> {<number>|0}
```

パラメータ

IPAddress	通信テストを行うホストの IP アドレスを入力します。 xxx.xxx.xxx.xxx 形式で、xxx は 0 ~ 255 までの 10 進数を入力します。
number	送信回数を数字で入力します。
0	送信回数を無限回に設定する場合は、0 を入力します。

例

ホストとの Ping テストが成功した場合

```
SYS_console>ping 192.168.200.1 5

Use CTRL-C or ping-stop to stop the ping process

SYS_console>
192.168.200.1 Alive. echo reply: id 4643, seq 1, echo-data-len 0
192.168.200.1 Alive. echo reply: id 4643, seq 2, echo-data-len 0
192.168.200.1 Alive. echo reply: id 4643, seq 3, echo-data-len 0
192.168.200.1 Alive. echo reply: id 4643, seq 4, echo-data-len 0
192.168.200.1 Alive. echo reply: id 4643, seq 5, echo-data-len 0
PING process stopped - statistics :
  ICMP echo request      :          5
  ICMP echo responses    :          5
PING process - press <CR> for prompt

SYS_console>
```

ホストとの Ping テストが失敗した場合

```
SYS_console>ping 192.87.24.100 5

Use CTRL-C or ping-stop to stop the ping process

SYS_console> PING process stopped - statistics :
  ICMP echo requests     :          5
  ICMP echo responses    :          0
PING process - press <CR> for prompt

SYS_console>
```

もし、ホストからの応答がない場合は、次の理由が考えられます。

- ・ ケーブル配線など物理的な接続が正しく行われていない。
- ・ 指定した IP アドレスのホストが存在しないか、ホストの電源が入っていない。
- ・ 指定したホストがルーティングテーブルにエントリされていないネットワークに存在している。
- ・ デフォルトゲートウェイが正しくデータグラムをルーティングできていない。
- ・ ARP テーブルの情報が古いまたは del-arp-entry コマンドで ARP テーブルのエントリを削除している。

Pingテストが実行されている間に、別のPingテストを実行することはできません。Pingテストが失敗した場合(ホストからのエコーレスポンスがない場合)も、エコーリクエストは指定した送信回数まで送信されます。1つのPingテストが終了する前に、別のホストとのPingテストを実行しようとした場合は、エラーメッセージが表示され、Pingテストは失敗という結果になります。

例

ホスト(192.168.200.100)との通信テストが失敗した場合

```
SYS_console>ping 192.168.200.100 0
```

```
Use CTRL-C or ping-stop to stop the ping process
```

```
SYS_console>ping 192.168.200.1 5
```

別のホスト(192.168.200.1)に対してpingコマンド実行

```
A ping process is active - can't start another ping process
```

```
SYS_console>ping-stop ping-stopコマンド実行
```

```
PING process stopped - statistics :
```

```
ICMP echo requests      :          35
```

```
ICMP echo responses     :           0
```

```
PING process - press <CR> for prompt
```

```
SYS_console>
```

```
SYS_console>ping 192.168.200.1 1
```

再度、ホスト(192.168.200.1)に対してpingコマンド実行

```
Use CTRL-C or ping-stop to stop the ping process
```

```
SYS_console>
```

```
PING process stopped - statistics :
```

```
ICMP echo request       :           1
```

```
ICMP echo responses     :           1
```

```
PING process - press <CR> for prompt
```

```
SYS_console>
```

ping-stop

現在行われているPingテストを停止します。

構文

```
ping-stop
```


5 SNMP コマンド

SNMP コマンドはSNMP関係のパラメータやデータベースを表示および設定するコマンドです。ここでは、いくつかのセクションに分けて説明しています。

SNMP コマンドを一覧するには、`snmp` と入力して`?`を押してください。

SNMP コミュニティストリングコマンド

SNMP コミュニティ名はMIB(Management Information Base)にアクセスすることを認証するためのパスワードとして使用される任意の文字列です。

SNMP(Version1)では、各リクエストにコミュニティ名を含めるように要求することで、セキュリティを確保します。

コミュニティ名をベースにしたアクセスレベルは、パブリックおよびプライベートコミュニティの2つに分けられます。

SNMPパブリックコミュニティでは、MIBのオブジェクトのRead(読み取り)のみ、SNMPプライベートコミュニティでは、MIBのオブジェクトのReadとWrite(書き込み)が可能です。

画面に`read`と表示されているものは、Read(読み取り)のみのアクセスレベルを意味します。

画面に`write`と表示されているものは、Read/Write(読み取り / 書き込み)のアクセスレベルを意味します。

get-comm

各アクセスレベル(ReadまたはRead/Write)のSNMP コミュニティ名を表示します。

構文

```
get-comm {read|write|*}
```

パラメータ

<code>read</code>	Readのアクセスレベルを持つコミュニティ名を表示したい場合は、 <code>read</code> と入力します。
<code>write</code>	Read/Writeのアクセスレベルを持つコミュニティ名を表示したい場合は、 <code>write</code> と入力します。
<code>*</code>	2つのアクセスレベル両方のコミュニティ名を表示したい場合は、 <code>*</code> と入力します。

例

```
SYS_console>get-comm *
get-comm *
Current read community is: < public >
Current write community is: < private >
SYS_console>
```

set-comm

各アクセスレベルの SNMP コミュニティ名を設定します。

構文

```
set-comm {read|write} <community-string>
```

パラメータ

read	Readのアクセスレベルを持つコミュニティ名を設定したい場合は、read と入力します。
write	Read/Writeのアクセスレベルを持つコミュニティ名を設定したい場合は、write と入力します。
community-string	SNMP コミュニティ名を入力します。

例

```
SYS_console>set-comm write password
set-comm write private
New write community is: < password >
SYS_console>
```

SNMP Trap コマンド

Trap(イベント通知)とは、SNMPエージェントに、明確に定義されているエラー(例外イベント)が発生した場合に、SNMPエージェントからSNMPマネージャに対してレスポンスされる PDU(Protocol Data Unit)です。

例外イベントは、リセット(warm-reset、cold-reset、電源を切る)したときや、SNMPリクエストを不定のコミュニティに発行した場合などに発生します。

Trapは、選択したマネージメントホストだけに送信されます。Trapを受信できるマネージメントホストは5件まで登録できます。

get-auth

認証 Trap 発行の有効 / 無効を表示します。

認識できないコミュニティ名を含むリクエストを受信した場合に、認証Trapを発行する(ENABLED)かしない(DISABLED)かを表示します。

構文

```
get-auth
```

例

```
SYS_console>get-auth
get-auth
The authentication trap messages are ENABLED
SYS_console>
```

set-auth

認証 Trap 発行の有効 / 無効を設定します。

構文

```
set-auth {enable|disable}
```

パラメータ

enable	認証トラップを発行する場合は enable と入力します。
disable	認証トラップを発行しない場合は disable と入力します。

例

```
SYS_console>set-auth enable
set-auth enable
The authentication trap message mode change OK
The authentication trap messages are ENABLED
SYS_console>
```

get-traps

Trap を受信する SNMP マネージメントホストのリストを表示します。

- ・IP アドレス
- ・SNMP コミュニティ名

構文

```
get-traps
```

例

```
SYS_console>get-traps
get-traps
                                SNMP TRAP TABLE
                                =====
                                IPADDR                                COMMUNITY
-----
192.168.200.020    -----                                public
-----
SYS_console>
```

add-trap

Trap を受信する SNMP マネージメントホストの登録を追加します。

SNMP マネージメントホストは 5 つまで登録可能です。

構文

```
add-trap <IpAddress> <trap-community>
```

パラメータ

IP アドレス	Trap を受信する SNMP マネージメントホスト(管理ステーション)の IP アドレスを入力します。 xxx.xxx.xxx.xxx 形式で、xxx は 0 ~ 255 までの 10 進数を入力します。
trap-community	Trap リクエストに含まれる SNMP コミュニティ名を入力します。

例

```
SYS_console>add-trap 192.168.200.020 public
add-trap 192.168.200.020 public
Entry 192.168.200.020 - public added
SNMP TRAP TABLE
```

```
=====
IPADDR                                COMMUNITY
-----                                -
192.168.200.020                      public
-----                                -
```

del-trap

Trap テーブルから SNMP マネージメントホストを削除します。

構文

del-trap <IPaddress>

例

```
SYS_console>
SYS_console>del-trap 192.168.200.020
192.168.200.020
Entry 192.168.200.020 - public deleted
SYS_console>
```

get-rmon-state

RMON の管理機能によって制御される各項目のしきい値を表示します。

get-rmon-state

例

```
RMON current configuration
=====
MaxTimeForRowCreation = 600

MaxHistCtlRows        = 20
MaxBucketsPerControl  = 500
MaxBucketsTotal       = 2000

AlarmMinInterval      = 1
AlarmMaxInterval      = 3600
MaxAlarmRows          = 50

MaxLogEntriesPerEvent = 15
MaxEventRows          = 10
=====
SYS_console>
```

6 データベースコマンド

データベースコマンドはスイッチングデータベースを管理するためのパラメータの設定や表示を行うコマンドです。

データベースコマンドを一覧するには、`switch-d`と入力して`?`を押してください。

スイッチングデータベースは8192エン트리あります。有効なエント리는、各々MACアドレスで区別される固有の情報をもっています。

各コマンドに共通のパラメータは次のとおりです。

パラメータ

ENTRY <index>	データベーステーブルのエン트리 No. です。 1 からデータベースの最大サイズ(8192)までの数字を入力します。
MAC Address <mac_address>	エントりに登録された(登録する)MAC アドレスです。 xx-xx-xx-xx-xx-xx形式で、xxは00 ~ FFまでの16進数を入力します。
LOCK	(ユーザによる設定はできません) ロックが「 + 」表示の場合は、エント리는消去されません。 (static entry) ロックが「 - 」表示の場合は、電源リセットによりエント리는消去されます。(dynamic entry)
MGMT	(ユーザによる設定はできません) MGMTが「 + 」表示の場合、エント리의MACアドレスはシステムがもともと保持しているシステムアドレスです。 MGMTが「 - 」表示の場合、エント리의MACアドレスはネットワーク上のステーションのMACアドレスとなります。
DPORT <dport>	指定されたMACアドレスの packets がフォワードされる宛先ポートです。 1 ~ 24 までのポート番号(port-id)を入力します。

学習テーブル

get-lt-entry

指定したインデックスのエントリを表示します。

構文

```
get-lt-entry <index>
```

パラメータ

index エントリ No. を 1 ~ 8192 までの 10 進数で入力します。

例

```
SYS_console>get-lt-entry 1
get-lt-entry 1
Entry ---- MAC Address ---- LOCK DPORT MGMT
=====
      1      00-00-1A-01-29-44      -      8      -
SYS_console>
```

例の表示内容は次のとおりです。

- ・エントリ No. は、1 です。
- ・MAC Address は、00-00-1A-01-29-44 です。
- ・LOCK は「 - 」(オフ)です。このエントリは電源リセットにより消去されます。
- ・このアドレスはポート 8 で学習されました。
- ・MGMT は「 - 」(オフ)です。このエントリはシステムアドレスではありません。

get-lt-16

指定したインデックスから 16 個分のエントリを表示します。

表示内容は get-lt-entry コマンドと同様です。

構文

```
get-lt-16 {<index>|*}
```

パラメータ

index 表示させる 16 エントリの最初のエントリ No. を入力します。

* 表示された 16 エントリの最後のエントリ No. から続きの 16 エントリを表示する場合は、* を入力します。最初から*を入力するとエントリ No.1 ~ 16 を表示します。また、スイッチングデータベースの最後のエントリ No.まで表示させた後に、*を入力するとスイッチングデータベースの最初のエントリ(エントリ No.1)に戻って 16 エントリを表示します。

例

```
SYS_console>get-lt-16 56
get-lt-16 56
  Entry  ----  MAC Address  ----  LOCK      DPORT      MGMT
=====
    56    08-00-2B-E7-3A-2C      -          1          -
    57    00-00-F4-2F-00-01      -          1          -
    58    08-00-20-7C-37-F2      -          1          -
    60    00-00-F4-30-1C-4D      -          1          -
    61    00-80-5F-7C-E1-B4      -          1          -
    62    08-00-2B-E6-E0-15      -          1          -
    63    00-00-F4-D8-84-1B      -          1          -
    64    00-C0-4F-D6-B9-46      -          1          -
    66    00-00-F4-70-71-B8      -          1          -
    67    00-20-35-E6-4B-9A      -          1          -
    68    00-A0-C9-00-04-1C      -          1          -
    69    08-00-2B-E6-F9-3F      -          1          -
    70    00-00-F4-90-35-65      -          1          -
    72    00-80-5F-52-83-F6      -          1          -
    73    00-00-F4-30-00-0A      -          1          -
    74    00-40-95-31-01-CB      -          1          -
SYS_console>get-lt-16 *
get-lt-16 *
  Entry  ----  MAC Address  ----  LOCK      DPORT      MGMT
=====
    75    00-00-0E-49-D4-45      -          1          -
    76    00-80-5F-46-86-C3      -          1          -
    77    00-40-95-26-E1-05      -          1          -
    78    00-00-E2-07-E4-4E      -          1          -
    79    00-A0-D2-40-00-C2      -          1          -
    80    00-00-F4-0D-7C-ED      -          1          -
***** End of Learn Table *****
SYS_console>
```

find-lt-addr

指定した MAC アドレスのエントリを表示します。

構文

```
find-lt-addr <mac_address>
```

パラメータ

mac_address 検索・表示するエントリの MAC アドレスを入力します。
 xx-xx-xx-xx-xx-xx形式で、xxは00 ~ FFまでの16進数を入力します。

例

指定した MAC アドレスがスイッチングデータベースに登録されている場合

```

SYS_console>find-lt-addr 08-00-2B-E7-3A-2C
find-lt-addr 08-00-2B-E7-3A-2C
Entry ---- MAC Address ---- LOCK DPORT MGMT
=====
      70      08-00-2B-E7-3A-2C      -      1      -
SYS_console>

```

指定した MAC アドレスがスイッチングデータベースに登録されていない場合

```

SYS_console>find-lt-addr 00-00-0E-49-D4-45
find-lt-addr 00-00-0E-49-D4-45
MAC Address - 00-00-0E-49-D4-45 - not in LT
SYS_console>

```

del-lt-entry

指定したインデックスのエントリを削除します。
システムアドレスのエントリを削除することはできません。

このコマンドはユーザがシステムアドレス以外のすべてのエントリをスイッチングデータベースから消去できるものですので、ご使用の際は充分ご注意ください。

構文

```
del-lt-entry <index>
```

パラメータ

index エントリ No. を 1 ~ 8192 までの 10 進数で入力します。

例

指定したエントリの削除が成功した場合

```

SYS_console>del-lt-entry 75
del-lt-entry 75
Deleting entry at index - 75 - OK
SYS_console>

```

システムアドレスのエントリを削除しようとした場合

```

SYS_console>del-lt-entry 1
del-lt-entry 1
Cannot delete a System Address
SYS_console>

```


del-lt-addr

指定した MAC アドレスのエントリを削除します。

指定した MAC アドレスがスイッチングデータベースにない場合は、エラーメッセージが表示されます。

構文

```
del-lt-addr <mac_address>
```

パラメータ

mac_address	削除するエントリの MAC アドレスを入力します。 xx-xx-xx-xx-xx-xx形式で、xxは00 ~ FFまでの16進数を入力します。
-------------	--

例

指定した MAC アドレスのエントリ削除が成功した場合

```
SYS_console>del-lt-addr 00-00-0E-49-D4-45
del-lt-addr 00-00-0E-49-D4-45
Deleting entry with MAC Address - 00-00-0E-49-D4-45 OK
SYS_console>
```

データベースに登録されていない MAC アドレスを指定した場合

```
SYS_console>del-lt-addr 00-11-22-33-44-55
MAC Address - 00-11-22-33-44-55 - not in LT
SYS_console>
```

add-lt-entry

エントリを追加・登録します。

構文

```
add-lt-entry <mac_address> <dport>
```

パラメータ

mac_address	追加・登録するエントリの MAC アドレスを入力します。 xx-xx-xx-xx-xx-xx形式で、xxは00 ~ FFまでの16進数を入力します。
dport	1 ~ 24 までのポート番号(port-id)を 10 進数で入力します。

例

```
SYS_console>add-lt-entry 00-40-95-31-01-CB 2
add-lt-entry 00-40-95-31-01-CB 2
Add LT entry OK

SYS_console>
```

7 バーチャルLAN コマンド

バーチャルLANとは、スイッチ内で、論理的にLANを分割する機能です。通常、スイッチのすべてのポートは、同一のブロードキャストドメイン(ブロードキャストパケットが届く範囲のネットワーク)に属します。一方、複数のバーチャルLANが定義されたスイッチは、ブロードキャストパケットの届く範囲を制限し、通信可能なグループを論理的に分割します。そのため、各グループごとに別々のスイッチに接続されているようにネットワークを構成することができます。

本製品のバーチャルLAN(VLAN)の設定には、バーチャル・ブロードキャストドメインとセキュリティVLANの2種類のポート・グルーピング方式があります。

ポート・グルーピングとは、接続ポートをグループ化し、そのグループ内で発生したブロードキャストパケットは他のグループにはフォワードしないというVLANの構成方法です。バーチャル・ブロードキャストドメインは、1ポートから24ポートをポートごと組み合わせさせてグループ化します。

セキュリティVLANは2ポートずつのグループa~lを、さらに組み合わせさせてグループ化するものです。

バーチャルLANコマンドを一覧するには、`vlan`と入力して`?`を押してください。

各コマンドに共通のパラメータは次のとおりです。

パラメータ

<code>run</code>	現在の設定を変更します。設定はただちに有効となりますが、NVRAMには保存されず、リセット後にはもとの設定が有効となります。
<code>nvrn</code>	NVRAMに保存されている設定を変更します。設定はリセット後に有効となります。
<code>all</code>	現在の設定を変更し、さらにNVRAMに保存されている設定も変更されます。設定はただちに有効となり、しかもNVRAMに保存されるので、リセット後も有効となります。

get-con-matrix

現在のVLANの設定状況をマトリックスで表示します。

縦軸はSource(送信元)ポート、横軸はパケットがフォワードされるDestination(宛先)ポートを示しています。

パケットの宛先であるMACアドレスが学習されていない場合は、「+」表示のポートすべてにフォワードされます。

一方、宛先であるMACアドレスがすでに学習されている場合、フレームは対応するポートにのみフォワードされます。ただし、「-」表示のポートはポート・グルーピング外のポートを表し、これらのポートへ宛てられたフレームはフォワードされません。

構文

```
get-con-matrix
```

例

```
SYS_console>get-con-matrix
VLAN CONNECTIVITY MATRIX
=====
          0 0 0 0 0 0 0 0 0 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 2 2 2 2 2
SRC to :1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4
1 :  - + - - - - - - - - - - - + + - - - - - - -
2 :  + - - - - - - - - - - - + + - - - - - - -
3 :  - - - + + + + + + + + + + - - - + + + - -
4 :  - - + - + + + + + + + + - - - + + + - -
5 :  - - + + - + + + + + + + - - - + + + - -
6 :  - - + + + - + + + + + + - - - + + + - -
7 :  - - + + + + - + + + + + - - - + + + - -
8 :  - - + + + + + - + + + + + - - - + + + - -
9 :  - - + + + + + - + + + + + - - - + + + - -
10 : - - + + + + + + - + + + + - - - + + + - -
11 : - - + + + + + + + - + + + - - - + + + - -
12 : - - + + + + + + + + - + + - - - + + + - -
13 : - - + + + + + + + + - + - - - + + + - -
14 : - - + + + + + + + + + - - - - + + + - -
15 : + + - - - - - - - - - - + - - - - - - -
16 : + + - - - - - - - - - - + - - - - - - -
17 : - - - - - - - - - - - - - - + - - - + +
18 : - - - - - - - - - - - - - - + - - - + +
19 : - - + + + + + + + + + + - - - - + + - -
20 : - - + + + + + + + + + + + + + + - + + - -
21 : - - + + + + + + + + + + + + + + - + - -
22 : - - + + + + + + + + + + + + + + - - -
23 : - - - - - - - - - - - - - + + - - - +
24 : - - - - - - - - - - - - - + + - - - +
```

SYS_console>

7 バーチャルLAN コマンド

バーチャル・ブロードキャストドメイン

バーチャル・ブロードキャストドメインは、1ポートから24ポートをポートごとに組み合わせさせてグループ化します。

1ポート単位で組み合わせを設定することができますが、設定した後、接続する端末(PCやワークステーション)をリセットしてARPテーブルをクリアする必要があります。ARPテーブルがクリアされていない場合、あるグループ内で発生したユニキャストパケットを、ほかのグループにもフォワードしますので、設定の際はご注意ください。

set-vbc-domain

バーチャル・ブロードキャストドメインを設定します。

構文

```
set-vbc-domain {run|nvram|all} <port_list>
```

パラメータ

port_list	バーチャル・ブロードキャストドメインとしてグループ化したいポートを1-2-3-4...の形式でダッシュで区切ってリストにします。
-----------	--

例

```
SYS_console>set-vbc-domain run 1-2-3-4
set-vbc-domain run 1-2-3-4
Set Runtime Virtual Broadcast Domain entry - OK

SYS_console>
```

del-vbc-domain

バーチャル・ブロードキャストドメインのエントリをvbcインデックスで検索・削除します。

vbcインデックスは、get-vbc-tblコマンドで表示されるバーチャル・ブロードキャストドメインのID番号です。

バーチャル・ブロードキャストドメインをパラメータ<all>で設定した場合、現在の設定と共にNVRAMに保存されている設定も変更されます。これらのvbcエントリを削除する場合はrun/nvram両方のパラメータでdel-vbc-domainコマンドを2回実行してください。

構文

```
del-vbc-domain {run|nvram} <domain_id>
```

パラメータ

domain_id	get-vbc-tblコマンドで表示されるvbcインデックスを10進数で入力します。
-----------	--

例

```
SYS_console>del-vbc-domain run 1
del-vbc-domain run 1
Delete Runtime Virtual Broadcast Domain entry - OK

RUNTIME Virtual Broadcast Domain Table is empty
SYS_console>
```

get-vbc-tbl

バーチャル・ブロードキャストドメインテーブルを表示します。

構文

```
get-vbc-tbl {run|nvram}
```

例

```
SYS_console>get-vbc-tbl run
run
RUNTIME VIRTUAL BROADCAST DOMAIN TABLE
=====

SYS_console>get-vbc-tbl run
RUNTIME VIRTUAL BROADCAST DOMAIN TABLE
=====
          0 0 0 0 0 0 0 0 0 1 1 1 1 1 1 1 1 1 2 2 2 2 2
VBC :    1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4
  1 :    - + + + + + + + - - - - - - - - - - + + + +
  2 :    + - + + + - - - + + + + + + + + + + + + + + +
```

7 バーチャルLAN コマンド

get-vbc-matrix

現在のバーチャル・ブロードキャストドメイン設定状況をマトリックス表示します。
縦軸はSource(送信元)ポート、横軸はパケットがフォワードされうるDestination
(宛先)ポートを示しています。

構文

```
get-vbc-matrix
```

例

```
SYS_console>get-vbc-matrix
get-vbc-matrix
VBC CONNECTIVITY MATRIX
=====
          0 0 0 0 0 0 0 0 0 1 1 1 1 1 1 1 1 1 2 2 2 2 2
SRC to :1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4
1 :  - + - - - - - - - - - - - - + + - - - - - - - -
2 :  + - - - - - - - - - - - - - + + - - - - - - - -
3 :  - - - + + + + + + + + + + - - - - + + + + - -
4 :  - - + - + + + + + + + + + - - - - + + + + - -
5 :  - - + + - + + + + + + + + - - - - + + + + - -
6 :  - - + + + - + + + + + + + - - - - + + + + - -
7 :  - - + + + + - + + + + + + - - - - + + + + - -
8 :  - - + + + + + - + + + + + - - - - + + + + - -
9 :  - - + + + + + + - + + + + - - - - + + + + - -
10 : - - + + + + + + + - + + + + - - - - + + + + - -
11 : - - + + + + + + + + - + + + - - - - + + + + - -
12 : - - + + + + + + + + - + + - - - - - + + + + - -
13 : - - + + + + + + + + + - + - - - - - + + + + - -
14 : - - + + + + + + + + + + - - - - - + + + + - -
15 : + + - - - - - - - - - - - - + - - - - - - - -
16 : + + - - - - - - - - - - - - + - - - - - - - -
17 : - - - - - - - - - - - - - - - - + - - - - + +
18 : - - - - - - - - - - - - - - - - + - - - - + +
19 : - - + + + + + + + + + + - - - - - + + + - -
20 : - - + + + + + + + + + + + + + + - + + - -
21 : - - + + + + + + + + + + + + + + + + - + - -
22 : - - + + + + + + + + + + + + + + + + - - -
23 : - - - - - - - - - - - - - - - + + - - - - +
24 : - - - - - - - - - - - - - - - + + - - - - +
SYS_console>
```

バーチャル・ブロードキャストドメイン設定例

バーチャル・ブロードキャストドメインの設定方法を説明します。ここでは、ポート1～8、9～16、17～24の3グループを例としてあげます。

set-vbc-domain コマンドでポート1～8のグループを作ります。
(ここでは、設定方法を <run> とします。)

```
SYS_console>set-vbc-domain run 1-2-3-4-5-6-7-8
```

set-vbc-domain コマンドを実行すると、画面に次のような表示がでます。
これで、ポート1～8がグループ化されました。

```
Set Runtime Virtual Broadcast Domain entry - OK
```

以下、同様に set-vbc-domain コマンドでポート9～16、17～24のグループをつ
くります。

```
SYS_console>set-vbc-domain run 9-10-11-12-13-14-15-16
SYS_console>set-vbc-domain run 17-18-19-20-21-22-23-24
```

設定した内容を get-vbc-tbl コマンドで確認します。

```
SYS_console>get-vbc-tbl run
RUNTIME VIRTUAL BROADCAST DOMAIN TABLE
=====
          0 0 0 0 0 0 0 0 0 1 1 1 1 1 1 1 1 1 2 2 2 2 2
VBC :    1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4
  1 :    + + + + + + + - - - - - - - - - - - - - - -
  2 :    - - - - - - - + + + + + + + - - - - - - - -
  3 :    - - - - - - - - - - - - - - - + + + + + + +
SYS_console>
```

7 バーチャルLAN コマンド

get-vbc-matrix コマンドで、各ポートのフォワード先を確認することができます。例えば、Source(送信元)ポート1が、ブロードキャストパケットや宛先不明アドレス(Unknown address)を受信した場合は、ポート2~8にフォワードすることを意味します。「-」表示のポート9~24へはフォワードされません。

```
SYS_console>get-vbc-matrix
VBC CONNECTIVITY MATRIX
=====
          0 0 0 0 0 0 0 0 0 1 1 1 1 1 1 1 1 1 2 2 2 2 2
SRC to :  1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4
  1 :    - + + + + + + - - - - - - - - - - - - - - -
  2 :    + - + + + + + - - - - - - - - - - - - - - -
  3 :    + + - + + + + - - - - - - - - - - - - - - -
  4 :    + + + - + + + - - - - - - - - - - - - - - -
  5 :    + + + + - + + - - - - - - - - - - - - - - -
  6 :    + + + + + - + - - - - - - - - - - - - - - -
  7 :    + + + + + - + - - - - - - - - - - - - - - -
  8 :    + + + + + + - - - - - - - - - - - - - - - -
  9 :    - - - - - - - + + + + + + - - - - - - - - -
 10 :    - - - - - - - + - + + + + + - - - - - - - - -
 11 :    - - - - - - - + + - + + + + - - - - - - - - -
 12 :    - - - - - - - + + + - + + + - - - - - - - - -
 13 :    - - - - - - - + + + + - + + - - - - - - - - -
 14 :    - - - - - - - + + + + + - + + - - - - - - - -
 15 :    - - - - - - - + + + + + - + - - - - - - - - -
 16 :    - - - - - - - + + + + + + - - - - - - - - - -
 17 :    - - - - - - - - - - - - - - - + + + + + + +
 18 :    - - - - - - - - - - - - - - - + - + + + + +
 19 :    - - - - - - - - - - - - - - - + + - + + + +
 20 :    - - - - - - - - - - - - - - - + + + - + + +
 21 :    - - - - - - - - - - - - - - - + + + + - + +
 22 :    - - - - - - - - - - - - - - - + + + + + - +
 23 :    - - - - - - - - - - - - - - - + + + + + - +
 24 :    - - - - - - - - - - - - - - - + + + + + + +
SYS_console>
```


セキュリティ VLAN

セキュリティ VLAN は 2 ポートずつのグループ a ~ l を、さらに組み合わせてグループ化するものです。2 ポートずつの組み合わせ(グループ a ~ l)を変更することはできませんが、設定を保存した後すぐにブロードキャストドメインの分割が有効となります。(拡張モジュールのアップリンクポートも同様、2 ポートずつのポートグループが定義されています。)

set-sec-vlan

セキュリティ VLAN を設定します。

構文

```
set-sec-vlan {run|nvram|all} <group_list>
```

パラメータ

group_list

セキュリティ VLAN としてグループ化したいグループを a-b-c-d... の形式でダッシュで区切って入力します。

2つのポートを1グループとして次のように定義しています。

グループ a	—	ポート 1-2
グループ b	—	ポート 3-4
グループ c	—	ポート 5-6
グループ d	—	ポート 7-8
グループ e	—	ポート 9-10
グループ f	—	ポート 11-12
グループ g	—	ポート 13-14
グループ h	—	ポート 15-16
グループ i	—	ポート 17-18
グループ j	—	ポート 19-20
グループ k	—	ポート 21-22
グループ l	—	ポート 23-24

(拡張モジュール・ポートグループ)

グループ m	—	ポート 25-26
グループ n	—	ポート 27-28
グループ o	—	ポート 29-30
グループ p	—	ポート 31-32

例

```
SYS_console>set-sec-vlan run g-ポート 13、14、15、16 をグループ化する例
set-sec-vlan run g-h
```

```
Set Runtime Security Virtual entry - OK
```

```
SYS_console>set-sec-vlan run f-ポート 11、12 をグループ化する例
```

```
set-sec-vlan run f
```

```
Set Runtime Security Virtual entry - OK
```

```
SYS_console>
```

7 パーチャルLAN コマンド

del-sec-vlan

セキュリティ VLAN のエントリを svlan インデックスで検索・削除します。
svlan インデックスは、get-svlan-tbl コマンドで表示されるパーチャル・ブロードキャストドメインの ID 番号です。
指定したエントリを削除した後のセキュリティ VLAN テーブルも表示します。

セキュリティ VLAN をパラメータ < all > で設定した場合、現在の設定と共に NVRAM に保存されている設定も変更されます。この様なエントリを削除する場合は run/nvram 両方のパラメータで del-sec-vlan コマンドを 2 回実行してください。

構文

```
del-sec-vlan {run|nvram} <lan_id>
```

パラメータ

lan_id get-svlan-tbl コマンドで表示される vlan インデックスを 10 進数で入力します。

例

```
SYS_console>del-sec-vlan run 2
del-sec-vlan run 2
Delete Runtime Security Virtual LAN entry - OK
```

get-svlan-tbl

セキュリティ VLAN テーブルを表示します。

構文

```
get-svlan-tbl {run|nvram}
```

例

```
SYS_console>get-svlan-tbl run
RUNTIME      SECURITY VIRTUAL LANs TABLE

          0 0 0 0 0 0 0 0 0 1 1 1 1 1 1 1 1 1 2 2 2 2 2
SVLAN - 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4
1 :   + + - - - - - - - - - - - - - - - - - - - - -
2 :   + + - - + + - - - - - - - - - - + + + + + + +
3 :   - - - - - - - - + + + + + + - - + + - - - - -
SYS_console>
```

get-svlan-matrix

現在のセキュリティ VLAN 設定状況をマトリックス表示します。

縦軸はSource(送信元)ポート、横軸はパケットがフォワードされうるDestination(宛先)ポートを示しています。

構文

```
get-svlan-matrix
```

例

```
SYS_console>get-svlan-matrix
SECURITY VLANs CONNECTIVITY MATRIX
=====
          0 0 0 0 0 0 0 0 0 1 1 1 1 1 1 1 1 1 2 2 2 2 2
SRC to :1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4
1 :  - + - - - - - - - - - - - - - + - - - - - - -
2 :  + - - - - - - - - - - - - - + + - - - - - - -
3 :  - - - + + + + + + + + + + - - - + + + + - - -
4 :  - - + - + + + + + + + + + - - - + + + + - - -
5 :  - - + + - + + + + + + + + - - - + + + + - - -
6 :  - - + + + - + + + + + + + - - - + + + + - - -
7 :  - - + + + + - + + + + + + - - - + + + + - - -
8 :  - - + + + + + - + + + + + - - - + + + + - - -
9 :  - - + + + + + + - + + + + + - - - + + + + - - -
10 : - - + + + + + + + - + + + + - - - + + + + - - -
11 : - - + + + + + + + + - + + + - - - + + + + - - -
12 : - - + + + + + + + + + - + + - - - + + + + - - -
13 : - - + + + + + + + + + + - + - - - + + + + - - -
14 : - - + + + + + + + + + + - - - - - + + + + - - -
15 : + + - - - - - - - - - - - - + - - - - - - - -
16 : + + - - - - - - - - - - - - + - - - - - - - -
17 : - - - - - - - - - - - - - - - - + - - - - + +
18 : - - - - - - - - - - - - - - - - + - - - - + +
19 : - - + + + + + + + + + + + - - - - - + + + - - -
20 : - - + + + + + + + + + + + + + + + - + + - - -
21 : - - + + + + + + + + + + + + + + + - + - - -
22 : - - + + + + + + + + + + + + + + + - - - - -
23 : - - - - - - - - - - - - - - - + + - - - - +
24 : - - - - - - - - - - - - - - - + + - - - - + -
SYS_console>
```

7 パーチャルLAN コマンド

セキュリティ VLAN 設定例

セキュリティ VLAN で、4 つの VLAN グループに分ける場合の設定方法を説明します。
ここでは、ポート 1 ~ 8、9 ~ 16、17 ~ 24 の 3 グループを例としてあげます。

set-sec-vlan コマンドでポート 1 ~ 8(グループ a ~ d)のグループを作ります。
(ここでは、設定方法を <run> とします。)

```
SYS_console>set-sec-vlan run a-b-c-d-
```

set-sec-vlan コマンドを実行すると、画面に次のような表示がでます。
これで、ポート 1 ~ 8 がグループ化されました。

```
Set Runtime Security Virtual entry - OK
```

以下、同様に set-sec-vlan コマンドでポート 9 ~ 16(グループ e ~ h)、ポート 17 ~ 24(グループ i ~ l)のグループをつくります。

```
SYS_console>set-sec-vlan run e-f-g-h  
SYS_console>set-sec-vlan run i-j-k-l
```

設定した内容を get-svlan-tbl コマンドで確認します。

```
SYS_console>get-svlan-tbl run  
RUNTIME SECURITY VIRTU LANs TABLE  
=====
```

	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2	2	2
SVLAN-	1	2	3	4	5	6	7	8	9	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	0	1	2	3	4
1 :	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2 :	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-
3 :	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+

get-svlan-matrixコマンドで、各ポートのフォワード先を確認することができます。例えば、Source(送信元)ポート1が、ブロードキャストパケットや宛先不明アドレス(Unkown address)を受信した場合は、ポート2~8にフォワードすることを意味します。「-」表示のポート9~24へはフォワードされません。

```

SYS_console>get-svlan-matrix
SECURITY VLANs CONNECTIVITY MATRIX
=====
          0 0 0 0 0 0 0 0 0 1 1 1 1 1 1 1 1 1 2 2 2 2 2
SRC to :  1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4
  1 :      - + + + + + + + - - - - - - - - - - - - - - -
  2 :      + - + + + + + + - - - - - - - - - - - - - - -
  3 :      + + - + + + + + - - - - - - - - - - - - - - -
  4 :      + + + - + + + + - - - - - - - - - - - - - - -
  5 :      + + + + - + + + - - - - - - - - - - - - - - -
  6 :      + + + + + - + + - - - - - - - - - - - - - - -
  7 :      + + + + + + - + - - - - - - - - - - - - - - -
  8 :      + + + + + + + - - - - - - - - - - - - - - - -
  9 :      - - - - - - - - + + + + + + - - - - - - - - -
 10 :      - - - - - - - - + - + + + + + + - - - - - - -
 11 :      - - - - - - - - + + - + + + + + - - - - - - -
 12 :      - - - - - - - - + + + - + + + + - - - - - - -
 13 :      - - - - - - - - + + + + - + + + - - - - - - -
 14 :      - - - - - - - - + + + + + - + + - - - - - - -
 15 :      - - - - - - - - + + + + + + - + - - - - - - -
 16 :      - - - - - - - - + + + + + + + - - - - - - - -
 17 :      - - - - - - - - - - - - - - - - + + + + + + +
 18 :      - - - - - - - - - - - - - - - - + - + + + + +
 19 :      - - - - - - - - - - - - - - - - + + - + + + +
 20 :      - - - - - - - - - - - - - - - - + + + - + + +
 21 :      - - - - - - - - - - - - - - - - + + + + - + +
 22 :      - - - - - - - - - - - - - - - - + + + + + - +
 23 :      - - - - - - - - - - - - - - - - + + + + + - +
 24 :      - - - - - - - - - - - - - - - - + + + + + + +
SYS_console>

```

7 バーチャル LAN コマンド

ポートモニタ

対象ポートを経由するパケットをすべて同じように別のポートへコピーするポートミラーリング機能についての設定を行います。

この機能を使うことによって、指定したポートの通信トラフィックをそのままミラーポートに出力し、ネットワークアナライザ(ネットワーク障害解析ツール)を通して監視することができます。

set-mon-port

ネットワークアナライザ(ネットワーク障害解析ツール)を接続するモニタポート(ミラーポート)を指定します。

構文

```
set-mon-port <port>
```

パラメータ

port モニタポートのポート番号を 1 ~ 24 の 10 進数で入力します。

例

```
SYS_console>set-mon-port 1
set-mon-port 1
Set of the Monitor Port - OK

SYS_console>
```

monitor

モニタをしたいポートを指定し、モニタを開始します。

指定したポートからのトラフィックはすべて set-mon-port コマンドで指定したモニタポートにそのまま転送されます。

このコマンドを実行する前に、ネットワーク障害解析ツールをモニタポートに接続し、set-mon-port コマンドでモニターポートの設定をしておいてください。

monitor コマンドで、あるポートをモニタしている場合、別のポートを指定して monitor コマンドを実行すると、そのポートのモニタは失敗という結果になります。最初のポートのモニタを stop-mon コマンドを実行して停止してから、別のポートのモニタを開始してください。

構文

```
monitor <port>
```

パラメータ

port モニタしたいポート番号を 1 ~ 24 の 10 進数で入力します。

例

```
SYS_console>monitor 2
monitor 2
  Start monitoring port 2  OK
SYS_console>
```

stop-mon

現在行われているモニタを停止します。

構文

```
stop-mon
```

例

```
SYS_console>stop-mon
stop-mon
  Stop monitoring  OK
SYS_console>
```

get-nv-mon

save-mon コマンドで NVRAM に保存されたポートモニタ設定情報を表示します。

構文

```
get-nv-mon
```

例

```
SYS_console>get-nv-mon
get-nv-mon
  The NVRAM based monitoring configuration is :
    Monitored port: 1
    Monitor port: 2
    Monitor ACTIVE
SYS_console>
```

save-mon

現在のポートモニタ設定(set-mon-port コマンドと monitor コマンドの設定)を NVRAM に保存します。本体をリセット(電源を切る、warm-reset、cold-reset)すると、この設定でモニタがスタート(monitor コマンドを実行)します。

構文

```
save-mon
```

例

```
SYS_console>save-mon
save-mon
  Save monitoring configuration to NVRAM OK
```

7 パーチャル LAN コマンド

clear-nv-mon

NVRAM に保存されているポートモニタ設定情報を削除します。

構文

```
clear-nv-mon
```

例

```
SYS_console>clear-nv-mon
clear-nv-mon
Clear NVRAM monitoring configuration OK
```


8 ポート設定コマンド

ポート設定コマンドは、ポートごとに動作モードの設定や表示を行うためのコマンドです。ポート設定コマンドを一覧するには、port-cfg と入力して[Enter]を押してください。

通信モードおよび通信速度の設定は、相手先の機器(ポート)の動作モードを確認してから行ってください。

次の表を参考に、印の組み合わせになるように設定してください。

特に、100M Full固定の機器(ポート)と接続する場合は、必ず本製品も 100M Full固定に設定してください。

		自ポート (CentreCOM 8124)					
		10M half	10M Full	100M half	100M Full	Auto-sense (Full)	Auto-sense (Half)
相手ポート	10M half		—	—	—	—	
	10M Full	—		—	—	—	—
	100M half	—	—		—	—	
	100M Full	—	—	—		—	—
	Auto negotiation (100/10/Full/Half)		—		—	(注1)	(注2)

注1 オートネゴシエーション(Auto negotiation)の結果、100M Fullになります。

注2 オートネゴシエーション(Auto negotiation)の結果、100M Halfになります。

3

get-port-cfg

現在のポート設定内容を表示します。表示される内容は次のとおりです。

- PORT_ID
ポート番号です。
- LAN_TYPE
ETH10 10Mbps固定に設定されています。
ETH100 100Mbps固定に設定されています。
ETH10/100 10/100Mbps自動認識に設定されています。
- LINK
ON リンクされています。
OFF リンクされていません。
- IF_TYPE
ポートのインターフェースを表示します。
TP ツイストペアケーブルです。
F/O 光ファイバーケーブルです。
- SPEED_SEL
通信速度の設定です。
FORC10 10Mbps固定に設定されています。
FORC100 100Mbps固定に設定されています。
ASENSE 10/100Mbps自動認識に設定されています。

- LAN_SPEED
 - 10Mbps FORC10に設定されているか、または ASENSE の設定で10Mbpsのリンクがされています。
 - 100Mbps FORC100に設定されているか、または ASENSE の設定で100Mbpsのリンクがされています。
 - NONE ASENSE に設定されていますがリンクしていません。
- FDPLX
 - 通信モードの設定です。
 - OFF Half Duplex に設定されています。
 - ON Full Duplex に設定されています。
- ENABLE
 - ポートステータスの設定です。
 - ON ポートの使用が有効(Enable)に設定されています。
 - OFF ポートの使用が無効(Disable)に設定されています。

構文

get-port-cfg

例

```

SYS_console>get-port-cfg
get-port-cfg
PORT_ID  LAN_TYPE  LINK  IF_TYPE  SPEED_SEL  LAN_SPEED  FDPLX  ENABLE
=====
1        ETH10/100 OFF   TP       ASENSE    NONE       OFF    ON
2        ETH10/100 OFF   TP       ASENSE    NONE       OFF    ON
3        ETH10/100 ON    TP       ASENSE    10Mbps    OFF    ON
4        ETH10/100 ON    TP       ASENSE    10Mbps    OFF    ON
5        ETH10/100 OFF   TP       FORC100   100Mbps   ON     ON
6        ETH10/100 OFF   TP       FORC100   100Mbps   ON     ON
7        ETH10/100 OFF   TP       ASENSE    NONE       OFF    ON
8        ETH10/100 OFF   TP       FORC100   100Mbps   OFF    ON
9        ETH10/100 OFF   TP       FORC100   100Mbps   OFF    ON
10       ETH10/100 OFF   TP       ASENSE    NONE       OFF    ON
11       ETH10/100 OFF   TP       ASENSE    NONE       OFF    ON
12       ETH10/100 OFF   TP       ASENSE    NONE       OFF    ON
13       ETH10/100 OFF   TP       ASENSE    NONE       OFF    ON
14       ETH10/100 OFF   TP       ASENSE    NONE       OFF    ON
15       ETH10/100 OFF   TP       ASENSE    NONE       OFF    ON
16       ETH10/100 OFF   TP       FORC100   100Mbps   OFF    ON
17       ETH10/100 OFF   TP       ASENSE    NONE       OFF    ON
18       ETH10/100 OFF   TP       ASENSE    NONE       OFF    ON
19       ETH10/100 OFF   TP       ASENSE    NONE       OFF    ON
20       ETH10/100 OFF   TP       ASENSE    NONE       OFF    ON
21       ETH10/100 OFF   TP       ASENSE    NONE       OFF    ON
22       ETH10/100 OFF   TP       ASENSE    NONE       OFF    ON
23       ETH10/100 OFF   TP       ASENSE    NONE       OFF    ON
24       ETH10/100 OFF   TP       ASENSE    NONE       OFF    ON
SYS_console>
    
```

set-port-dplex

指定したポートの通信モードをFull Duplex(全二重通信)かHalf Duplex(半二重通信)かに設定します。

デフォルト値はHalf Duplexです。
設定はただちにNVRAMに保存されます。

構文

```
set-port-dplex <port_number> {half|full}
```

パラメータ

port_number	通信モードを設定するポートのポート番号を1～24の10進数で入力します。
half	Half Duplexに設定する場合は、halfと入力します。
full	Full Duplexに設定する場合は、fullと入力します。

例

```
SYS_console>set-port-dplex 5 full
Port <5> duplex changed to full
SYS_console>
```

set-grp-dplex

複数ポートを指定して、通信モードをFull Duplex(全二重通信)かHalf Duplex(半二重通信)かに設定します。

構文

```
set-grp-dplex <port_list> {half|full}
```

パラメータ

port_list	指定する複数ポートを、1～24までの10進数で1-2-3-4...の形式でダッシュで区切って入力します。
half	Half Duplexに設定する場合は、halfと入力します。
full	Full Duplexに設定する場合は、fullと入力します。

例

ポート14、15、16をFull Duplexに設定する場合

```
SYS_console>set-grp-dplex 14-15-16 full
Port <14> duplex changed to full
Port <15> duplex changed to full
Port <16> duplex changed to full
SYS_console>
```

set-speed-sel

指定したポートの通信速度を 10Mbps固定、100Mbps固定、Auto-sense(自動認識)のいずれかに設定します。

デフォルト値は Auto-sense です。
設定はただちに NVRAM に保存されます。

構文

```
set-speed-sel <port_number> {asense|100|10}
```

パラメータ

port_number	通信モードを設定するポートのポート番号を 1 ~ 24 の 10 進数で入力します。
asense	Auto-sense(10Mbps/100Mbps自動認識)に設定する場合は、asense と入力してください。
100	100Mbps 固定に設定する場合は、100 と入力してください。
10	10Mbps 固定に設定する場合は、10 と入力してください。

例

```
SYS_console>set-speed-sel 15 asense
Port <15> speed changed to asense
SYS_console>
```

set-grp-speed

指定したポートの通信速度を 10Mbps固定、100Mbps固定、Auto-sense(自動認識)のいずれかに設定します。

構文

```
set-grp-speed <port_list> {asense|100|10}
```

パラメータ

port_list	指定する複数ポートを、1 ~ 24 までの 10 進数で 1-2-3-4... の形式でダッシュで区切って入力します。
asense	Auto-sense(10Mbps/100Mbps自動認識)に設定する場合は、asense と入力してください。
100	100Mbps 固定に設定する場合は、100 と入力してください。
10	10Mbps 固定に設定する場合は、10 と入力してください。

例

ポート 14、15、16を Auto-senseに設定する場合

```
SYS_console>set-grp-speed 14-15-16 asense
Port <14> speed changed to asense
Port <15> speed changed to asense
Port <16> speed changed to asense
SYS_console>
```

set-port-state

ポートの使用を有効(Enable)/無効(Disable)に設定できます。

スパニングツリー機能が有効な場合は、スパニングツリーコマンドのset-prt-enbコマンドを使用します。

構文

```
set-port-state <port_number> {enable|disable}
```

パラメータ

port_number	通信モードを設定するポートのポート番号を1～24の10進数で入力します。
enable	ポートの使用を有効にする場合は、enableと入力します。
disable	ポートの使用を無効にする場合は、disableと入力します。

例

```
SYS_console>set-port-state 15 enable
Port <15> state changed to enable
SYS_console>
```

9 統計情報コマンド

統計情報コマンドはポートの動作状況やパケットの統計カウンタなど、統計情報の表示を行うためのコマンドです。

統計情報コマンドを一覧するには、`statistics` と入力して`?`を押してください。

clr-cnt

イーサネットおよびブリッジングのすべてのカウンタを消去(ゼロに)します。

構文

```
clr-cnt
```

例

```
SYS_console>clr-cnt
clr-cnt
SYS_console>
```

get-eth-cnt

指定したポートのイーサネット統計情報を表示します。

構文

```
get-eth-cnt <port_number>
```

パラメータ

port_number

イーサネット情報を表示するポート番号を1～24の10進数で入力します。

例

```
SYS_console>get-eth-cnt 3
3
Ethernet Statistics for port 3
=====
Good Bytes Received                :      69432
Good Multicast Bytes Received      :         19
Good Broadcast Bytes Received     :         137
Good Bytes Sent                    :      54046
Good Frames Receive                :         400
Frames Sent                        :         245
Receive and Transmit Collisions   :           0
Receive and Transmit Late Collisions :           0
Receive CRC or Alignment Error    :           0
Receive Frame > 1518 bytes with Bad CRC :           0
Receive Fragments                 :           3
Receive Frame > 1518 bytes with Good CRC :           0
=====
SYS_console>
```

get-colls-cnt

指定したポートのコリジョン情報を表示します。

構文

```
get-colls-cnt <port_number>
```

パラメータ

port_number コリジョン情報を表示するポート番号を1～24の10進数で入力します。

例

```
SYS_console>get-colls-cnt 3
get-colls-cnt 3
Ethernet Collision Counters for port 3
=====
Collision count      :          0
Late Collision Count :          0
=====
SYS_console>
```

get-rmon-cnt

指定したポートのRMONグループ1統計情報を表示します。

構文

```
get-rmon-cnt <port_number>
```

パラメータ

port_number RMONグループ1の統計情報を表示するポート番号を1～24の10進数で入力します。

例

```
SYS_console>get-rmon-cnt 3
get-rmon-cnt 3
Ethernet RMON Counters for port 3
=====
etherStatsOctets      :    393002
etherStatsPkts       :     1937
etherStatsBcastPkts  :          0
etherStatsMcastPkts  :          0
etherStatsCRCAlignPkts:          0
etherStatsUndersizePkts:        62
etherStatsOversizePkts :          0
etherStatsRuntPkts   :          62
etherStatsJabberPkts :          0
etherStatsCollisions :         10
SYS_console>
```

get-sdist-cnt

指定したポートのRMONグループ1の packetsize 統計情報を各 packetsize ごとに表示します。

構文

```
get-sdist-cnt <port_number>
```

パラメータ

port_number RMON グループ 1 の packetsize 統計情報を表示する
ポート番号を 1 ~ 24 の 10 進数で入力します。

例

```
SYS_console>get-sdist-cnt 3
get-sdist-cnt 3
RMON Packet Size Distribution Counters for port 3
=====
etherStatsPkts64Octets      :      16704
etherStatsPkts65to127Octets :      5730
etherStatsPkts128to255Octets :      1594
etherStatsPkts256to511Octets :      1288
etherStatsPkts512to1023Octets :       934
etherStatsPkts1024to1518Octets :      4095
SYS_console>
```

get-mgm-brcnt

システム全体のおよびポート別の packetsize 統計情報を表示します。

構文

```
get-mgm-brcnt
```

例

```
SYS_console>get-mgm-brcnt
get-mgm-brcnt
Management Port Counters
=====
Frm   Received   :      2059
Bytes Received   :    391878
Frm   Filtered   :         0
Frm Received Bcast:      854
Frm Transmitted  :     9492
Frm Transmit Ucast:    1076
Frm Transmit Mcast:    8416
Frm Transmit Bcast:         0
```


Received from port:	FRAMES	BYTES
1	0	0
2	0	0
3	2057	391758
4	2	120
5	0	0
6	0	0
7	0	0
8	0	0
9	0	0
10	0	0
11	0	0
12	0	0
13	0	0
14	0	0
15	0	0
16	0	0
17	0	0
18	0	0
19	0	0
20	0	0
21	0	0
22	0	0
23	0	0
24	0	0
Transmit to port	FRAMES	BYTES
1	531	33984
2	531	33984
3	1658	357565
4	531	33984
5	531	33984
6	531	33984
7	531	33984
8	531	33984
9	531	33984
10	531	33984
11	531	33984
12	531	33984
13	531	33984
14	531	33984
15	531	33984
16	531	33984
17	531	33984
18	531	33984
19	531	33984
20	531	33984
21	531	33984
22	531	33984
23	531	33984
24	531	33984


SYS_console>

10 スパニングツリーコマンド

ブリッジ(スイッチ)は、パケットがどちらのセグメントから送信されてきたかを判断して、パケットを中継するので、2つのブリッジ間に2つ以上のルート(経路)がある場合、パケットが重複して届いたり、パケットのループが形成されてネットワークがダウンしてしまいます。

スパニングツリーとは、各ブリッジ(スイッチ)同士が情報を交換しあって、ツリー構造を構成するような中継ルートを選択し、ループが発生するのを防ぐためのアルゴリズムです。ツリーが構成された場合、1つのルートだけが実際に使用され、残りのルートは中継動作を停止して待機状態となるため、2つのブリッジでループ状にネットワークを構成しても、パケットのルートはループにはなりません。残りのルートのブリッジは、動作状態のブリッジの故障などにより、ツリーの再構成が行われるまで待機します。

スパニングツリーコマンドは、スパニングツリー機能を使用する際に必要なパラメータの設定・表示を行うためのコマンドです。

スパニングツリーコマンドを一覧するには、sp-tree と入力して  を押してください。

get-stp

スパニングツリーを使用する(Enable)か、使用しない(Disable)かの現在およびリセット後の設定を表示します。

構文

```
get-stp
```

例

```
SYS_console>get-stp
get-stp
Running Spanning Tree engine is enabled
Next session the Spanning Tree engine will be enabled
SYS_console>
```

set-stp

スパニングツリーを使用する(Enable)か、使用しない(Disable)かの設定を行います。

スパニングツリーを構成する場合は、すべてのブリッジ(スイッチ)のスパニングツリー設定をオンにしている必要があります。

設定は、ただちにNVRAMに保存されますが、本体をリセット(warm-reset、cold-reset、電源を切る)した後に有効となります。

構文

```
set-stp {enable|disable}
```

パラメータ

enable	スパニングツリーを使用する場合は、enable と入力します。
disable	スパニングツリーを使用しない場合は、disable と入力します。

例

```
SYS_console>set-stp enable
set-stp enable
Device ST_ENABLE parameter change in the NVRAM OK
SYS_console>
```

get-st-bcfg

スパニングツリーのブリッジ機能部分パラメータの現在の設定を表示します。

構文

get-st-bcfg

例

```
SYS_console>get-st-bcfg
get-st-bcfg
802.1D SPANNING TREE BRIDGE INFO
=====
Designated Root      : 8000-00-00-1A-01-29-44
Bridge Priority      : 32768
Root Cost            : 0
Root Port           : 0
Max Age             : 20
Hello Time          : 2
Hold Time           : 1
Forward Delay       : 15
Bridge Max Age      : 20
Bridge Hello Time   : 2
Bridge Forward Delay : 15
----- The time units are seconds -----
SYS_console>
```

get-st-pcfg

スパニングツリーのポート部分パラメータの現在の設定を表示します。

構文

```
get-st-pcfg
```

例

```
SYS_console>get-st-pcfg
get-st-pcfg
STP PORT TABLE
=====
ID Prior State PathCost   DesigRoot       DesigCost   DesigBridge     DesigPort
-----
 1  128  Fwd    100  8000-00-00-F4-9C-09-80  0  8000-00-00-F4-9C-09-80  8001
 2  128  Fwd    10  8000-00-00-F4-9C-09-80  0  8000-00-00-F4-9C-09-80  8002
 3  128  Fwd    10  8000-00-00-F4-9C-09-80  0  8000-00-00-F4-9C-09-80  8003
 4  128  Fwd    10  8000-00-00-F4-9C-09-80  0  8000-00-00-F4-9C-09-80  8004
 5  128  Fwd    10  8000-00-00-F4-9C-09-80  0  8000-00-00-F4-9C-09-80  8005
 6  128  Fwd    10  8000-00-00-F4-9C-09-80  0  8000-00-00-F4-9C-09-80  8006
 7  128  Fwd    10  8000-00-00-F4-9C-09-80  0  8000-00-00-F4-9C-09-80  8007
 8  128  Fwd    10  8000-00-00-F4-9C-09-80  0  8000-00-00-F4-9C-09-80  8008
 9  128  Fwd    10  8000-00-00-F4-9C-09-80  0  8000-00-00-F4-9C-09-80  8009
10  128  Fwd    10  8000-00-00-F4-9C-09-80  0  8000-00-00-F4-9C-09-80  800a
11  128  Fwd    10  8000-00-00-F4-9C-09-80  0  8000-00-00-F4-9C-09-80  800b
12  128  Fwd    10  8000-00-00-F4-9C-09-80  0  8000-00-00-F4-9C-09-80  800c
13  128  Fwd    10  8000-00-00-F4-9C-09-80  0  8000-00-00-F4-9C-09-80  800d
14  128  Fwd    10  8000-00-00-F4-9C-09-80  0  8000-00-00-F4-9C-09-80  800e
15  128  Fwd    10  8000-00-00-F4-9C-09-80  0  8000-00-00-F4-9C-09-80  800f
16  128  Fwd    10  8000-00-00-F4-9C-09-80  0  8000-00-00-F4-9C-09-80  8010
17  128  Fwd    10  8000-00-00-F4-9C-09-80  0  8000-00-00-F4-9C-09-80  8011
18  128  Fwd    10  8000-00-00-F4-9C-09-80  0  8000-00-00-F4-9C-09-80  8012
19  128  Fwd    10  8000-00-00-F4-9C-09-80  0  8000-00-00-F4-9C-09-80  8013
20  128  Fwd    10  8000-00-00-F4-9C-09-80  0  8000-00-00-F4-9C-09-80  8014
21  128  Fwd    10  8000-00-00-F4-9C-09-80  0  8000-00-00-F4-9C-09-80  8015
22  128  Fwd    10  8000-00-00-F4-9C-09-80  0  8000-00-00-F4-9C-09-80  8016
23  128  Fwd    10  8000-00-00-F4-9C-09-80  0  8000-00-00-F4-9C-09-80  8017
24  128  Fwd    10  8000-00-00-F4-9C-09-80  0  8000-00-00-F4-9C-09-80  8018

SYS_telnet>
```

get-st-syscfg

すべてのポートのスパニングツリーステータスを表示します。

構文

```
get-st-syscfg
```

例

```
get-st-syscfg
SYSTEM PORTS STATE
=====
PORT_ID STATE ST_RCV ST_XMT MG_RCV MG_XMT OP_RCV OP_XMT LRN_ENB
-----
1      Fwd  +   +   +   +   +   +   +
2      Fwd  +   +   +   +   +   +   +
3      Fwd  +   +   +   +   +   +   +
4      Fwd  +   +   +   +   +   +   +
5      Fwd  +   +   +   +   +   +   +
6      Fwd  +   +   +   +   +   +   +
7      Fwd  +   +   +   +   +   +   +
8      Fwd  +   +   +   +   +   +   +
9      Fwd  +   +   +   +   +   +   +
10     Fwd  +   +   +   +   +   +   +
11     Fwd  +   +   +   +   +   +   +
12     Fwd  +   +   +   +   +   +   +
13     Fwd  +   +   +   +   +   +   +
14     Fwd  +   +   +   +   +   +   +
15     Fwd  +   +   +   +   +   +   +
16     Fwd  +   +   +   +   +   +   +
17     Fwd  +   +   +   +   +   +   +
18     Fwd  +   +   +   +   +   +   +
19     Fwd  +   +   +   +   +   +   +
20     Fwd  +   +   +   +   +   +   +
21     Fwd  +   +   +   +   +   +   +
22     Fwd  +   +   +   +   +   +   +
23     Fwd  +   +   +   +   +   +   +
24     Fwd  +   +   +   +   +   +   +
SYS_console>
```

set-br-prio

スパニングツリーパラメータのブリッジプライオリティを設定します。
通常動作状態になるための優先順位を設定します。数が小さいほど優先度は高くなります。

構文

```
set-br-prio <priority>
```

パラメータ

priority	優先順位を設定するための数字を 0 ~ 65535までの 10進数で入力します。 ルートブリッジの場合は、0を入力します。
----------	--

例

```
SYS_console>set-br-prio 32768
set-br-prio 32768
The Bridge Priority was changed
SYS_console>
```

set-br-maxage

スパニングツリーパラメータの MaxAge(最大エージ)を設定します。
MaxAgeは、待機状態ブリッジが、動作状態ブリッジから定期的に送信されるBPDUフレームが送信されなくなったと認識するまでの時間です。

構文

```
set-br-maxage <maxage>
```

パラメータ

maxage	MaxAgeの時間を 6 ~ 40までの 10進数(秒単位)で入力します。
--------	---------------------------------------

例

```
SYS_console>set-br-maxage 20
set-br-maxage 20
The Bridge Max Age was changed
SYS_console>
```

set-br-hellot

スパニングツリーパラメータのHelloTime(ハロータイム)の設定をします。
HelloTimeは、ブリッジがBPDUフレームを送信する間隔です。

構文

```
set-br-hellot <hello_time>
```

パラメータ

hello_time 送信間隔を1～10までの10進数(秒単位)で入力します。

例

```
SYS_console>set-br-hellot 1
set-br-hellot 1
The Bridge Hello Time was changed
SYS_console>
```

set-br-fwdel

スパニングツリーパラメータのフォワードディレイタイムの設定をします。
フォワードディレイタイムは、トポロジ変更後に、リスニング状態 ラーニング状態 フォワーディング状態にそれぞれ遷移するまでの時間です。

構文

```
set-br-fwdel <forward_delay>
```

パラメータ

forward_delay スパニングツリー状態遷移時間を4～30までの10進数(秒単位)で入力します。

例

```
SYS_console>set-br-fwdel 15
set-br-fwdel 15
The Bridge Forward Delay was changed
SYS_console>
```

set-prt-prio

スパニングツリーパラメータのポートプライオリティを設定します。

ポートを同じネットワークに接続した場合、どのポートを動作状態にするかの優先順位を設定します。数が小さいほど優先度が高くなります。

同じ値の場合は、ポート番号の小さい方が優先度が高くなります。(実際には、ポート番号に割り当てられたMACアドレスを参照しています。MACアドレスはポート番号の小さいほうから割り当てられるため、ポート番号が小さいものが優先されます。)

ブリッジプライオリティを比較して、該当ブリッジ(またはポート)が最優先であるとわかれば、ポートプライオリティおよびパスコストの設定は参照されません。

構文

```
set-prt-prio <port_number> <port_priority>
```

パラメータ

port_number	優先度を設定するポート番号を1～24の10進数で入力します。
port_priority	優先順位を設定するための数字を1～255までの10進数で入力します。

例

```
SYS_console>set-port-prio 1 128
set-port-prio 1 128
command 'set-port-prio' not found
SYS_console>
```

set-prt-enb

スパニングツリーで指定したポートの使用を有効(Enable)か、無効(Disable)に設定します。

構文

```
set-prt-enb <port_number> {enable|disable}
```

パラメータ

port_number	ポート番号を1～24の10進数で入力します。
enable	指定したポートを使用する場合は、enableと入力します。
disable	指定したポートを使用しない場合は、disableと入力します。

例

```
SYS_console>set-prt-enb 1 enable
set-prt-enb 1 enable
Received trap from undefined task-id : 160000
The Port State was changed to <enable> for port 1
SYS_console>
```

set-prt-pcost

スパニングツリーパラメータのパスコストを設定します。

パスコストは、ポートからルートブリッジへのルートコストのことです。数が小さいほど優先度が高くなります。

ブリッジプライオリティを比較して、該当ブリッジ(またはポート)が最優先であるとわかれば、ポートプライオリティおよびパスコストの設定は参照されません。

構文

```
set-prt-pcost <port_number> <path_cost>
```

パラメータ

port_number	ポート番号を 1 ~ 24 の 10 進数で入力します。
path_cost	ルートコストを 1 ~ 65535 の 10 進数で入力します。

例

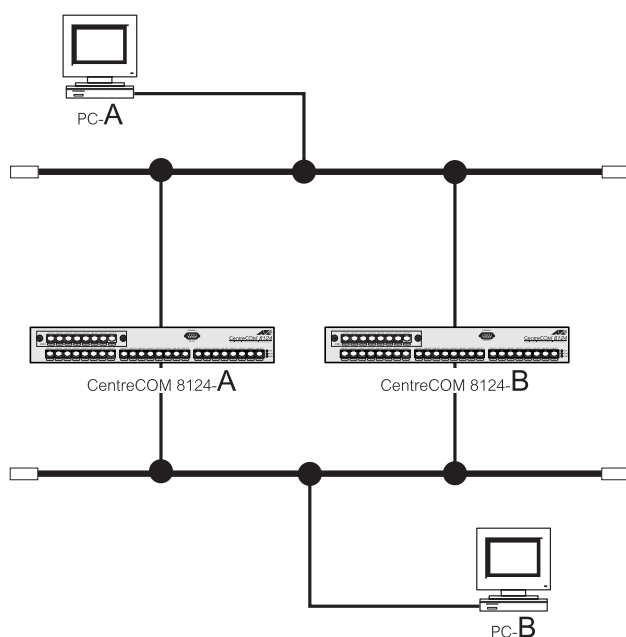
```
SYS_console>set-prt-pcost 1 100
set-prt-pcost 1 100
The Port Path Cost was changed for port 1
SYS_console>
```

スパニングツリー設定例

実際に、2台のスイッチを用いてループ状にネットワークを構成した場合のスパニングツリー設定方法を説明します。

スパニングツリー構成を構築する場合は、スパニングツリーパラメータの設定を行ってから、ケーブルを接続してください。また、接続方法などを誤らないように、あらかじめ構成図を用いるとスムーズに接続できます。

PC-AからPC-Bに通信を行う際、下図のような2つの経路を用意する場合の、本製品AとBの設定を例としてあげます。



ここでは、待機状態にするブリッジを CentreCOM 8124-A、動作状態にするブリッジを CentreCOM 8124-Bとします。

CentreCOM 8124-A の設定

最初に、set-stp コマンドでスパニングツリー機能をオンにします。

```
SYS_console>set-stp enable
Device ST_ENABLE parameter change in the NVRAM OK
```

get-stp コマンドで設定を確認します。

画面に次のような表示がでて、リセット後に設定が有効となることを意味します。

```
SYS_console>get-stp
Running Spanning Tree engine is disabled
Next session te Spanning Tree engine will be enabled
```

set-br-prio コマンドで、ブリッジプライオリティを 200 に設定します。

```
SYS_console>set-br-prio 200
The Bridge Priority was canged
```

リセット(ここでは warm-reset コマンド)をして、ログインします。

```
SYS_console>warm-reset
```

ログイン後に、get-stp コマンドで、設定内容を確認します。

```
SYS_console>get-stp
Running Spanning Tree engne is enabled
Next session te Spanning Tree engine will be enabled
```

```
SYS_console>get-st-bcfg
802.1D SPANNING TREE BRIDGE INFO
=====
Designated Root      : 0064-00-00-F4-7A-29-44
Bridge Priority      :    200
Root Cost            :      0
Root Port            :      0
Max Age              :    20
Hello Time           :      2
Hold Time            :      1
Forward Delay        :    15
Bridge Max Age       :    20
Bridge Hello Time    :      2
Bridge Forward Delay :    15
----- The time units are seconds -----
```

CentreCOM 8124-B の設定

set-stp コマンドでスパニングツリー機能をオンにします。

```
SYS_console>set-stp enable
Device ST_ENABLE parameter change in the NVRAM OK
```

set-br-prio コマンドで、ブリッジプライオリティを 100 に設定します。

```
SYS_console>set-br-prio 100
The Bridge Priority was canged
```

リセットをして、ログインします。

10 スパニングツリーコマンド

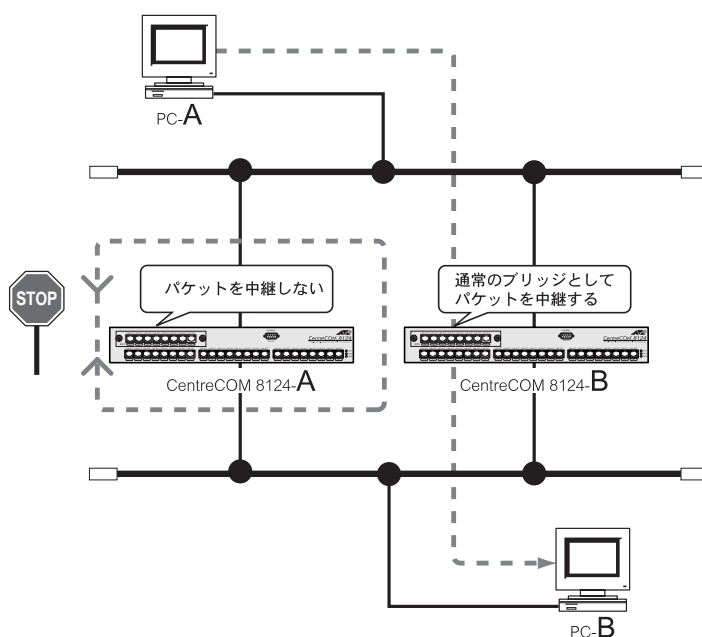
ログイン後に、get-stp コマンドで、設定内容を確認します。

```
SYS_console>get-stp
Running Spanning Tree engine is enabled
Next session te Spanning Tree engine will be enabled

SYS_console>get-st-bcfg
802.1D SPANNING TREE BRIDGE INFO
=====
Designated Root      : 0064-00-00-F4-7A-29-44
Bridge Priority      : 100
Root Cost            : 0
Root Port            : 0
Max Age              : 20
Hello Time           : 2
Hold Time            : 1
Forward Delay        : 15
Bridge Max Age       : 20
Bridge Hello Time    : 2
Bridge Forward Delay : 15
----- The time units are seconds -----
```

3

以上で、設定が終了しました。CentreCOM 8124-Bのブリッジプライオリティを小さい値にすることによって、Bは通常動作状態のブリッジ(ルートブリッジ)となります。スパニングツリー機能が開始すると、自動的にCentreCOM 8124-Aを待機状態ブリッジとし、ループが形成されないようにします。



1 1 パラメータデフォルト値

Console

user name	なし
password	なし
prompt	SYS_console>

System

tftp mode	client
-----------	--------

SNMP

Read Community:	public
Write Community:	private
Authentication Mode:	enable
Traps Managers:	なし

Port Configuration

port duplex	HALF
port select	ASENSE

Spanning Tree

Spanning Tree	disable	
Bridge Priority	32768	0 - 65535
Bridge Max Age	20	6 - 40 sec
Bridge Hello Time	2	1 - 10 sec
Bridge Forward Delay	15	4 - 30 sec
Port Priority	128	1-255
Path Cost	100	1 - 65535

4

付録

この章では、トラブルシューティング、TFTPによるソフトウェアのダウンロード方法、スイッチの基本的な概念、仕様について説明しています。

1 トラブルシューティング

ここでは、本製品を使用中になんらかのトラブルが発生したときの対処方法について説明します。

以下の処置をしても正常に動作しないときは、アライドテレシス サポートセンターまでご連絡ください。

セルフテストについて

本製品には、本体起動時のセルフテスト機能(自己診断機能)が搭載されており、万が一異常が発生したときには、CLIでそのテスト結果を知らせるとともに、異常の内容に応じて動作を制御します。

セルフテストを実行する場合は、set-stst-level コマンドでパラメータを Enable(有効)に設定します。

このコマンドを Disable(無効)に設定している場合、セルフテストは実行されません。デフォルト値は Enable(有効)です。

テスト結果に表示されるセルフテスト項目は次のとおりです。

- ・ DRAMチェックサムテスト
- ・ NVRAMチェックサムテスト
- ・ Flashメモリチェックサムテスト
- ・ PCI Chipテスト

セルフテストが正常に終了した場合のテスト結果は次のとおりです。

例

```
Runing Self Test
Testing Dram ... DRAM test passed
Testing Nvram ... NVRAM test passed
Testing flash ... FLASH test passed
Testing pci ... PCI test passed
```

トラブルと思ったら

トラブルが発生したときは、まず発生したトラブルやLEDの状態を確認のうえ、該当の説明をお読みください。

電源が入らない

本装置に電源を供給する場合には、必ず電源電圧に適合したケーブルをご使用ください。日本国内などでAC100Vでご使用する場合は、本製品に付属の電源ケーブルをご使用ください。

電源ケーブルに断線がないか確認してください。

電源ケーブルが通電していることを確認してください。

電源ケーブルが正しく接続されているか確認してください。

本製品はAC100-240Vで動作します。電源プラグは、必ずAC100V-240V 50/60Hzの電源コンセントに接続してください。付属の電源ケーブルはAC100V用ですのでご注意ください。

通信できない

ケーブルを確認してください。

10BASE-Tにはカテゴリ3以上のUTPケーブル、100BASE-TXにはカテゴリ5のUTPケーブルを使用してください。

UTPケーブルにはストレートタイプとクロスタイプがあります。

本製品とPCやワークステーションなどの端末(MDIポート)を接続する場合は、ストレートタイプを使用してください。

本製品とリピータやスイッチ(MDI-Xポート)を接続する場合は、クロスタイプを使用してください。

10BASE-Tおよび100BASE-TXでは、本製品と端末を接続するケーブルの長さ、本製品とリピータやスイッチを接続する長さはすべて100m以内と規定されています。

LNK LEDを確認してください。

接続先の機器と正しく接続されているか、また接続先の機器に電源が入っているかを確認してください。

SNMPエージェントの設定で、ポートを使用不可(disable)に設定していないか確認してください。

「ポート設定コマンド」のset-port-state コマンド、または「スパニングツリーコマンド」のset-prt-enb コマンドの設定を確認してください。

ポートの動作モードの設定を確認してください。

本製品の通信速度および通信モードの設定が正しく行われているかを確認してください。

特に、100Mbps Full固定の機器(ポート)と接続する場合は、必ず本製品も100M Full固定に設定してください。

2 ソフトウェアのダウンロード

TCP/IP装置(ホスト)間のファイルは、TFTPを使って転送することができます。TFTPを使用すると、ホスト間でブート可能なファイルを転送しなくても、単純なファイル転送セッションによりファイル転送を行うことができます。TFTPは、ごくわずかなメモリしか必要としません。

ここでは、本製品のソフトウェアを、TFTPを使ってダウンロードする方式について説明します。

用意するもの

- ・ ダウンロードするソフトウェアファイル
- ・ ホスト(PCまたはワークステーション)
- ・ TFTPプログラム(クライアントまたはサーバ)
- ・ CentreCOM 8124

ダウンロード手順

本製品では、set-tftp-mode コマンドで2種類のTFTPダウンロード方式が選択できます。1つはホストをTFTPサーバとする方法(クライアントモード)、もう1つはホストをTFTPクライアントとする方法です。

ここでは、各ダウンロード方式別にダウンロード手順を説明をします。

クライアントモード(CentreCOM 8124)を選択した場合

本製品およびホスト(TFTPサーバ)にIPアドレスが設定されていることを確認します。

本製品とTFTPサーバがネットワーク上で通信可能な状態にあることを確認します。

set-sw-file コマンドで、ダウンロードするソフトウェアファイル名を指定します。TFTPサーバに格納されているソフトウェアファイル名と同じファイル名を設定します。

set-tftp-srvr コマンドで、TFTPサーバのIPアドレスを設定します。

set-tftp-mode コマンドで、クライアントモードを指定します。

ホスト上のTFTPサーバを起動します。

sw-dnld コマンドを実行すると、本体が自動的にリセットされ、次の様な画面が表示されます。



ユーザ名を入力するためのプロンプトが表示されますが、キー入力をしないでください。

注意

```
Please Login
  username:

  Operate remote TFTP server !

  Starting Download ...
```

ダウンロードが開始されると、画面が次のような表示になります。



ダウンロード実行中はキー入力をしないでください。

注意

```
Operate remote TFTP server !

  Starting Download ...
  .....
```

ダウンロードが終了した場合、画面に次のような表示がでた後、再び本体がリセットされます。

```
TFTP download completed !

  Init FLASH
  Start Erasing FLASH
  Finished erasing FLASH
  Copy code from RAM into FLASH...
  .....

  Transferring control to the downloaded code.

  Initializing ...
```

ネットワーク上に障害が発生するなどしてタイムアウトが発生した場合は、画面に次のような表示がでます。

続いて、再度ダウンロードが実行されます。

4回ダウンロードに失敗した場合は、自動的にダウンロードモードは終了し、本体がリセットされます。

```
Starting Download ...
  ..TFTP: read from DEV_TFTP failed Error Code: Time out

  Operate remote TFTP server !

  Starting Download ...
```

ログイン画面に戻ります。

2 ソフトウェアのダウンロード

サーバモード(CentreCOM 8124)を選択した場合

本製品およびホスト(TFTPクライアント)にIPアドレスが設定されていることを確認します。

本製品とTFTPクライアントがネットワーク上で通信可能な状態にあることを確認します。

set-tftp-mode コマンドで、サーバモードを指定します。

sw-dnld コマンドを実行すると、本体が自動的にリセットされ、画面に次のような表示がでます。

```
Please Login
  username:

  Operate remote TFTP client !

  Starting Download ...
```

リモートホストからTFTP「put」を実行します。

TFTPの一般的なコマンドラインは次のようになります。

```
tftp <direction> <localfile> <host IP> <hostfile> <mode>
```

direction	「put」を指定します。
localfile	ソフトウェアファイル名を指定します。
hostIP	本製品のIPアドレスを指定します。
hostfile	ソフトウェアファイル名を指定します。(パスは必要ありません。)
mode	ファイル転送モードを指定します。 イメージファイル用ASCII、あるいは8進ファイル用の場合は、バイナリ転送モードに設定します。

ダウンロードが開始されると、画面が次のような表示になります。



ダウンロード実行中はキー入力をしないでください。

注意

```
Operate remote TFTP client !

  Starting Download ...
  .....
```

ダウンロードが終了した場合、画面に次のような表示がでた後、再び本体がリセットされます。

```
TFTP download completed !

Init FLASH
  Start Erasing FLASH
  Finished erasing FLASH
  Copy code from RAM into FLASH...
  .....
  Transferring control to the downloaded code.

Initializing ...
```

ネットワーク上に障害が発生するなどしてタイムアウトが発生した場合は、画面に次のような表示がでます。

再度、ダウンロードを開始する場合は、TFTP「put」を実行してください。4回ダウンロードに失敗した場合は、自動的にダウンロードモードは終了し、本体がリセットされます。

```
Starting Download ...
  ..TFTP: read from DEV_TFTP failed Error Code: Time out

  Operate remote TFTP client !


  Starting Download ...
```

ログイン画面に戻ります。

2 ソフトウェアのダウンロード

サーバモードを選択した場合、クライアント(リモートホスト)から TFTP「put」を実行する前にログインすると、sw-dnld コマンドを実行中のため、使用できるコマンドが TFTPダウンロードに関連したコマンドのみに限定されます。

ダウンロード(TFTP put)を実行せずに終了する場合は、リセットを行ってください。

sw-dnld コマンドを実行中(クライアントから TFTP「put」を実行する前)にログインして  を入力してみると、コマンドグループは、次のように表示されます。

```
SYS_console>?
?
                Commands groups are:
                -----
console          Console related commands
system          System related commands
ip              IP related commands
port-cfg        Port Configuration related commands
-----
use ! for previous cmd, ^U to clear line, ^W to clear previous word
-----
```

ダウンロードが4回失敗に終わると、画面が次のような表示になり、ダウンロードモードは自動的に終了します。

その後、本体がリセットされ、ログイン画面に戻ります。

```
Starting Download ...
.TFTP: read from DEV_TFTP failed Error Code: Time out

Operate remote TFTP client !

Starting Download ...
...TFTP: read from DEV_TFTP failed Error Code: Time out

Operate remote TFTP client !

Starting Download ...
TFTP: read from DEV_TFTP failed Error Code: 5

Operate remote TFTP client !

Starting Download ...
...TFTP: read from DEV_TFTP failed Error Code: Time out

Download failed: retry exceeded !!

Transferring control to the downloaded code.

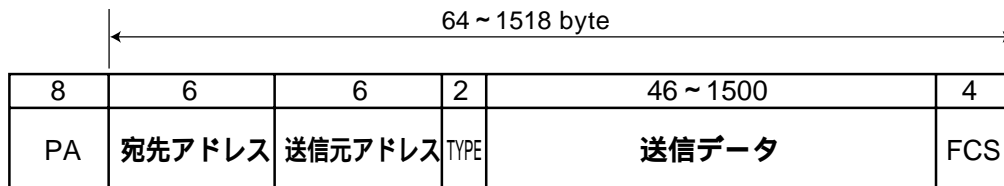
Initializing ...
```

3 スイッチの基本的な概念

ここでは、イーサネット・スイッチの一般的な概念について説明します。
従来のファースト・イーサネット LAN システムは、一本のケーブルに何台ものパソコンやワークステーションを接続し、複数のユーザ間で 100Mbps の帯域幅を共有する媒体共有型のネットワークでした。ネットワーク上の端末は一度に一台しか通信できず、データは一度にすべてのステーションに送出されます。この方法では、接続するパソコンの数とデータ量が増加するごとに、パフォーマンスが低下してしまいます。
スイッチはポートごとに 100Mbps の全帯域を専有してフルに活用することができる媒体専有型の機器です。スイッチの利用により、同時に複数のユーザが異なる通信相手と通信することが可能となり、効率のよいパフォーマンスが実現できます。

MAC アドレス

イーサネットでは、ケーブルを共有するため、ネットワーク上のすべての機器に固有のアドレスが付けられています。この固有のアドレスを MAC(Media Access Control=媒体アクセス制御)と呼びます。
MAC アドレスは、OSI 参照モデルのデータリンク層で行われるフレーミング(パケットの組立て)の際に挿入され、自分の MAC アドレス(送信元アドレス)と通信先の MAC アドレス(宛先アドレス)がそれぞれ書き込まれます。これによって、ネットワーク上のパケットは誰からのデータで、誰宛のデータかを識別することができるのです。
イーサネットでは、パケットの各フィールドを以下のように規定しています。



- PA : プリアンブル
- TYPE : IPX、Apple Talk などのプロトコルのタイプ、またはデータのフィールドの長さ
- FCS : フレーム・チェック・エラー・シーケンス 誤りを検出するとそのフレームを破棄する

ブリッジについて

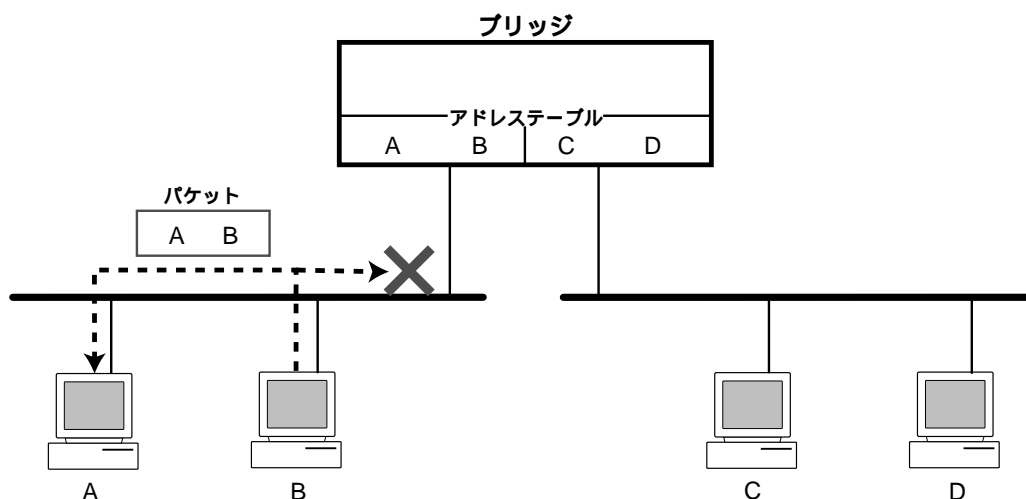
スイッチとは、ポート毎にブリッジング機能を備えたハブであり、機能的にいうと、マルチポートブリッジと考えられます。
ブリッジは、データリンク層(第2層)の情報である MAC アドレスを参照することによって、パケットのフィルタリングを行います。該当する宛先端末が接続されているセグメントにのみパケットを送出し、該当しないセグメントには送出不しいというのが、フィルタリングの機能です。
ブリッジ内部にはアドレステーブルがあり、このアドレステーブルに各端末の MAC アドレスを登録させ、どこのセグメントの端末かを判断します。前述のフィルタリング機能により、不要なパケットを他のセグメントに出さないため 1 セグメントあたりのトラ

3 スイッチの基本的な概念

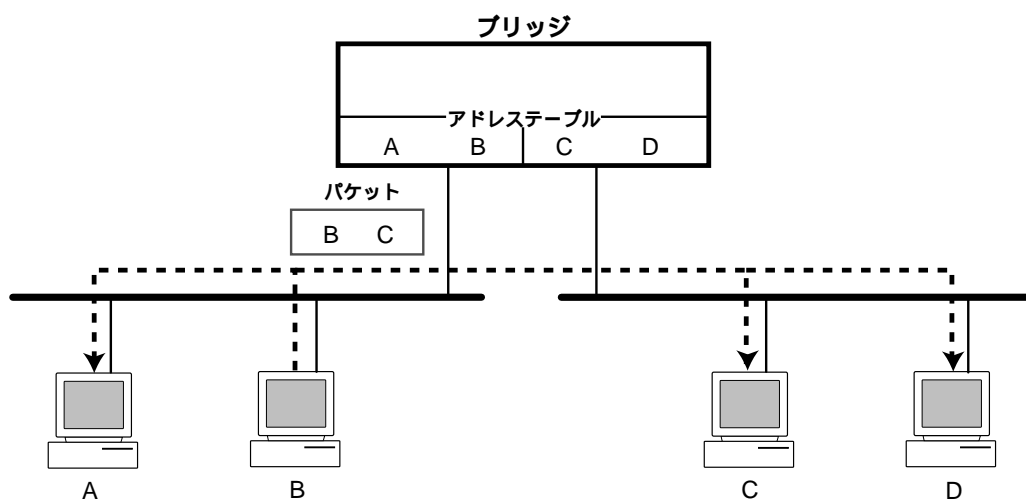
フィックを抑制することができます。(ただし、宛先が不明なパケットはブリッジに接続されるすべてのセグメントにフォワードされます。また、ブロードキャストパケット<全端末に同報するパケット>も同様です。)

フィルタリング機能

B から A のパケットは C・D 側には中継されない



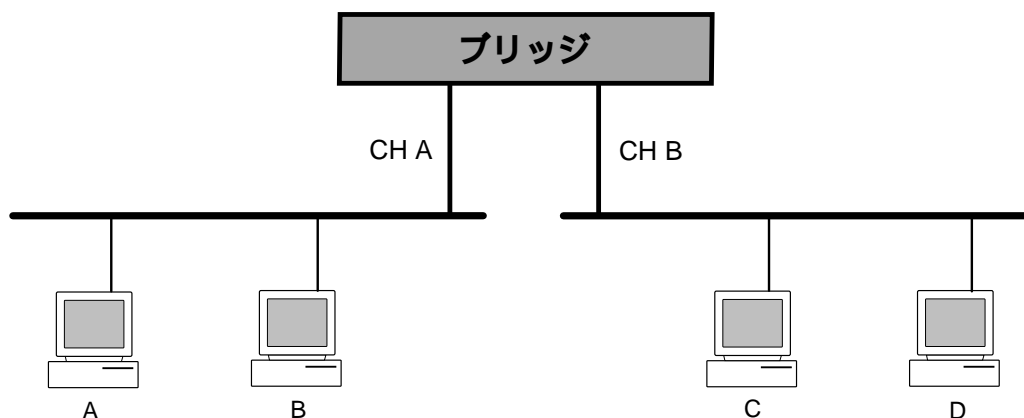
B から C へのパケットは中継される



ブリッジは受信したデータを一度 RAM 上に記憶しておきます。そして反対側のポートの回線が送信できる状態のとき(他の端末が送信していないとき)に反対側にフォワードします。

各ポートのネットワークは論理的に分割されているので、独立に通信できます。つまり、両側で同時に送信してもコリジョンは起こりません。

ブリッジの自動学習機能



ブリッジの動作	CH A	CH B
ブリッジの電源をいれた直後、アドレステーブルには何も登録されていない。		
AがC宛にパケットを送信。(ブリッジはCを知らないなので、CH Bのセグメントに送信)	A	
CがAに返事をする。(ブリッジはAがCH Aにいることを知っているなのでCH Aに送信)	A	C
BがA宛にパケットを送信。(ブリッジはAがCH Aにいることを知っているなのでCH Bには送信しない)	AB	C
DがA宛にパケットを送信。(ブリッジはAがCH Aにいることを知っているなのでCH Aに送信する)	AB	CD
AがDに返事をする。(ブリッジはDがCH Bにいることを知っているなのでCH Bに送信する。)	AB	CD

スイッチとは

前述したようなブリッジング機能を利用し、送信されたパケットの中のMACアドレスを読みとり、該当する端末が接続されているポートにのみパケットを転送する機能を持っているのがスイッチです。

スイッチには、

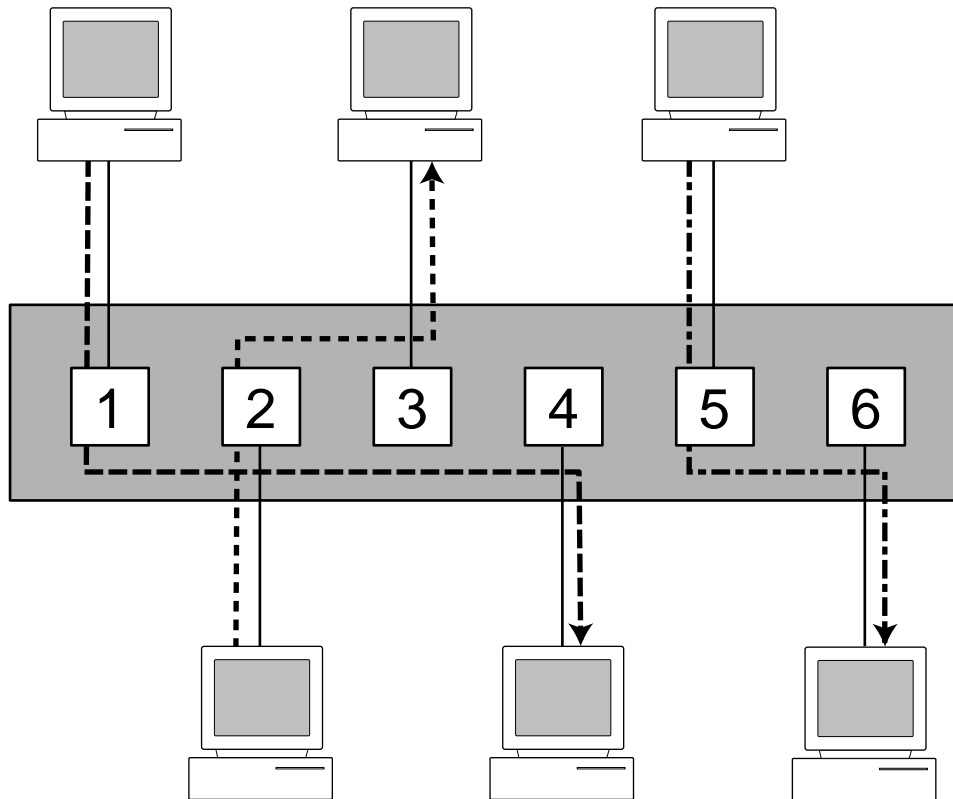
- ・ ポート毎にフィルタリングテーブルを持っていてスイッチをする
- ・ ポート毎にコリジョンドメインを形成する
- ・ スイッチ内部では、複数のポート間で同時に転送できるとともに、パケットを蓄積するバッファがあるため、コリジョンは発生しない
- ・ ブロードキャストパケットは全ポートに対してフォワーディングするなどの特長があげられます。

3 スイッチの基本的な概念

イーサネット・スイッチの原理

パケットは必要なポートのみ中継される。

複数組の同時通信が可能(1 4、2 3、5 6の通信は同時に行うことができる)



4 仕様

ここでは、本製品に関する詳細な情報を必要とする方を対象に、本製品の動作条件や、コネクタのピンアサインなどを説明します。

コネクタの仕様

10BASE-T インターフェイス

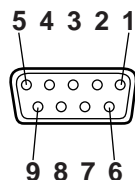
コネクタは、RJ-45型(RJ-45 8pinハーモニカタイプ)と呼ばれるモジュラージャックを使用しています。



ピン番号	信号 (MDI-Xポート)
1	送信データ (+)
2	送信データ (-)
3	受信データ (+)
4	未使用
5	未使用
6	受信データ (-)
7	未使用
8	未使用

RS-232C インターフェイス

コネクタはD-Sub 9pin(オス)タイプを使用しています。



DB9 (メス)	信号名 (JIS略号)	DB9 (メス)	信号名 (JIS略号)
2	RxD (RD)	2	RxD (RD)
3	TxD (SD)	3	TxD (SD)
4	DTR (ER)	4	DTR (ER)
6	DSR (DR)	6	DSR (DR)
1	DCD (CD)	1	DCD (CD)
7	RTS (RS)	7	RTS (RS)
8	CTS (CS)	8	CTS (CS)
5	SG (SG)	5	SG (SG)
9	N/C	9	N/C

ケーブル仕様

10BASE-T/100BASE-TX ケーブル

10BASE-Tでは、カテゴリ3以上の2対4芯UTPケーブル(シールドなしツイストペアケーブル)を、100BASE-TXでは、カテゴリ5の2対4芯UTPケーブルを使用します。

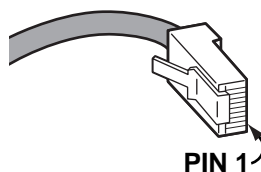
UTPケーブルにはストレートタイプとクロスタイプがあります。

一般的に、ストレートタイプはリピータやスイッチ(MDI-Xポート)とPCやワークステーションなどの端末(MDIポート)を接続する場合に、クロスタイプはリピータやスイッチ同士(MDI-Xポート同士)を接続する場合に使用します。

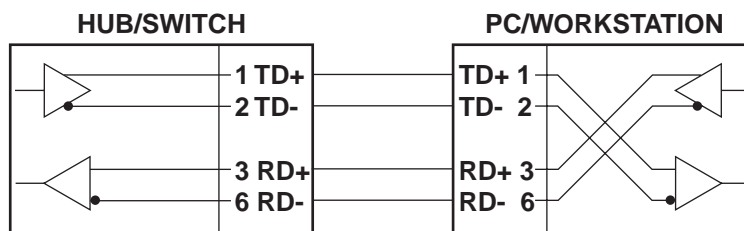
本製品とPCやワークステーションなどの端末(MDIポート)を接続する場合は、ストレートタイプを使用してください。

本製品とリピータやスイッチ(MDI-Xポート)を接続する場合は、クロスタイプを使用してください。

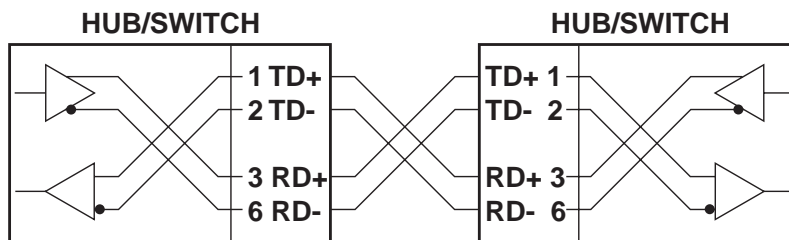
ストレートケーブル結線、クロスケーブル結線は図のとおりです。



ストレートケーブル結線



クロスケーブル結線



ケーブルのカテゴリ

イーサネットで使用するケーブルに関する特性仕様(信号に対する減衰量、インピーダンスなど)は、IEEE802.3で詳細に規定されています。

特にツイストペアケーブルに関しては、TIA/EIA-568-Aで規定されたカテゴリが参照されています。

カテゴリは、次の表が示すように、1～5に分けられていて、カテゴリの数値が高いほど高い周波数の伝送(つまり高速な通信)に対応します。つまり、カテゴリはケーブルの品質を示す目安を定義したものです。

上位カテゴリは下位カテゴリを包含しますので、カテゴリ5のUTPケーブルを用意しておけば、10BASE-T、100BASE-TX、ISDNなどに共通でご利用になることができます。

ツイストペアケーブルのカテゴリ

カテゴリ	ケーブル種別	交流特性	仕様	ツイスト/ft.	10BASE-T	100BASE-TX
1	シールドなし ツイストなし	N/A	CCITT	なし	不可	不可
2	UTP	100 ± 0	RS232 1BASE5 AT&T, PDS	なし	不可	不可
3	通常のUTP	100 ± 5	T1, AT&T ISDN 10BASE-T IBM Type 3	3~5	可	不可
4	拡張UTP	100 ± 30	EIA, TIA 10BASE-T NEMA	5~8	可	不可
5	UTP	100 ± 30	EIA, TIA 10BASE-T 100BASE-T	8~10	可	可

4 仕様

拡張モジュール仕様

本製品には、別売で「CentreCOM 8101」と「CentreCOM 8102F」の2種類の拡張モジュールオプションが用意されています。

CentreCOM 8101

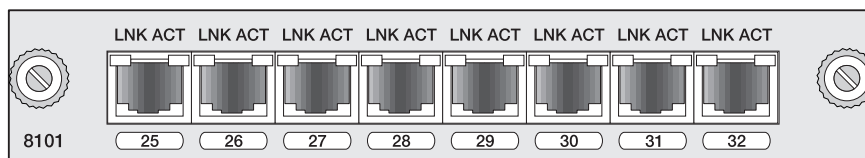
CentreCOM 8101は、10Mbpsと100Mbpsを自動認識する100BASE-TXポートを8ポート装備しています。

項目	仕様
外形寸法	162 mm (W) x 290 mm (D) x 27 mm (H) (但し、ネジ部含まず)
重量	約345 g

仕様

UTPポート(100BASE-TX/10BASE-Tポート)の仕様です。

項目	仕様
通信方式	IEEE 802.3 10BASE-T/IEEE 802.3u 100BASE-TX
コネクタ	RJ-45
通信速度	100Mbps/10Mbps (自動検出)
通信モード	Auto negotiate (デフォルト) / Full duplex / Half duplex
ケーブル	UTPカテゴリ5 (10BASE-Tの場合は、UTPカテゴリ3以上)
最大ケーブル長	100m



CentreCOM 8101

CentreCOM 8102F

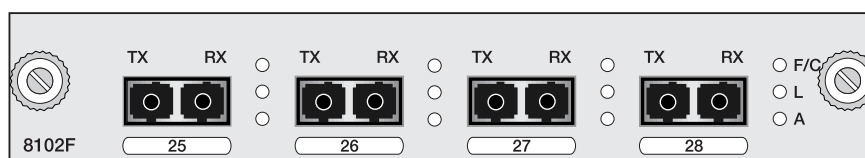
CentreCOM 8102Fは、SCタイプの光コネクタをもつ 100BASE-FXポートを 4ポート 装備しています。

項目	仕様
外形寸法	162 mm (W) x 290 mm (D) x 27 mm (H) (但し、ネジ部含まず)
重量	約345 g

仕様

100BASE-FXポートの仕様です。

項目	仕様
通信方式	IEEE 802.3u 100BASE-FX
コネクタ	SC 2芯
通信速度	100Mbps
通信モード	Full duplex (デフォルト) / Half duplex
ケーブル	62.5/125 μ m マルチモード光ファイバ
最大ケーブル長	412m (Half duplexモード) 2000m (Full duplexモード)



CentreCOM 8102F

本製品の仕様

機器仕様

定格入力電圧	: AC100V-120V/AC200-240(切替設定不要)
入力電圧範囲	: AC90 ~ 255V
定格周波数	: 50Hz/60Hz
最大入力電流	: 1.5A(AC100V時)
平均消費電力	: 50W
発熱量	: 40kcal/h
電源プラグ	: 3極プラグ
電源ケーブル	: AC100-120V用
動作時温度	: 0 ~ 40
動作時湿度	: 80%以下(結露なきこと)
保管時温度	: -20 ~ 60
保管時湿度	: 95%以下(結露なきこと)
機器寸法	: 442.0(W)× 430.0(D)× 66.0(H)mm
重量	: 4.42kg
適用規格	: VCCIクラスA

サポートする MIB

MIB II	: RFC1213
イーサネット MIB	: RFC1284
ブリッジ MIB	: RFC1286
RMON MIB	: RFC1757
プライベート MIB	

5

保証とユーザサポート

この章では、本製品の保証と、障害の際のユーザサポート、調査依頼書のご記入方法について説明します。

1 保証とユーザサポート

保証

製品に添付している「製品保証書」の「製品保証規定」をお読みになり、「お客さまインフォメーション登録カード」に必要事項を記入して、当社「お客さまインフォメーション登録係」までご返送ください。

「お客さまインフォメーション登録カード」が返送されていない場合、保証期間内の無償での修理や、障害発生時のユーザサポートなどが受けられません。

ユーザサポート

ユーザサポートを受けていただく際には、まず、このマニュアルの調査依頼書を(拡大)コピーしたものに必要事項を記入し、下記のサポート先にFAXしてください。記入内容などについては、『2 調査依頼書のご記入にあたって』を参照してください。

サポート連絡先

アライドテレシス株式会社 サポートセンター

Tel: ☎ 0120-860-772 月～金曜日まで(祝・祭日を除く)
10:00～12:00 13:00～17:00

Fax: ☎ 0120-860-662 年中無休
24時間受付

2 調査依頼書のご記入にあたって

本依頼書は、障害の原因をできるだけ迅速に見つけるためにご記入いただくものです。ご提供いただく情報が不十分な場合には、原因究明に時間がかかったり、最悪な場合には、問題が解決できないこともあります。

迅速に問題の解決を行うためにも、弊社担当がお客様の環境を理解できるよう、以下の点に沿ってご記入ください。

記入用紙で書き切れない場合には、プリントアウトなどを別途添付ください。

なお、状況によりご連絡の遅れることもございますが、あらかじめご了承ください。

使用しているハードウェア、ソフトウェアについて

- * 製品名、製品のシリアル番号(S/N)、製品リビジョンコード(Rev):

(例)



を調査依頼書に記入してください。製品のシリアル番号、製品リビジョンコードは、製品に添付されているバーコードシールに記入されています。

- * ソフトウェアバージョンを記入してください。
ソフトウェアバージョンを、CLK(コマンドラインインターフェイス)でシステムコマンドの sys-stat コマンドを実行して確認することができます。

お問い合わせ内容について

- * どのような症状が発生するのか、それはどのような状況で発生するのかを出来る限り具体的に(再現できるように)記入してください。
- * エラーメッセージやエラーコードが表示される場合には、表示されるメッセージの内容のプリントアウトなどを添付してください。

ネットワーク構成について

- * ネットワークとの接続状況や、使用されているネットワーク機器がわかる簡単な図を添付してください。
- * 他社の製品をご使用の場合は、メーカー名、機種名、バージョンなどをご記入ください。

